



学内広報



2002 . 6 . 26
東京大学広報委員会

五月祭開催される

(平成14年5月24日(金)~5月26日(日))



(29ページに関連記事)

目次

特別記事	2	部局ニュース	29
東京大学学生表彰「東京大学総長賞」の推薦受付を開始、本学名誉教授懇談会開かれる、第1回東大ホームカミングデイ開催される		医学部附属病院がワールドカップ開催に合わせてテロ対策シミュレーションを実施、未来の科学者サテライトスクール2002春サイエンスアカデミア物性研究所コース、宇宙線研究所コース開催される	
一般ニュース	4	掲示板	32
事務職員海外研修報告、平成14年度外国人学生数、東京大学外国人留学生後援会平成13年度事業報告・収支決算及び平成14年度事業計画・収支予算について		AGS研究助成企画案の募集、必要な資料の所在が一度に調べられます - OPACとNACSIS - Webcatの横断検索開始のお知らせ -	
キャンパスニュース	29	広報委員会	33
五月祭開催される		訃報(神山雅英名誉教授)	34
		淡青評論「昨今の東大らしさ 雑感」	36

≡ 特別記事 ≡

東京大学学生表彰「東京大学総長賞」の推薦受付を開始

このほど、本学の学生を対象として、学業、課外活動、各種社会活動、大学間の国際交流等の各分野において、「優れた評価を受けた」あるいは「本学の名誉を高めた」などの功績があった個人又は団体に、総長が表彰を行う「東京大学総長賞」が設けられることになった。

この表彰は、本学教職員・学生からの推薦に基づき、「東京大学学生表彰選考委員会」(以下「選考委員会」という。)が選考にあたり総長が表彰するものである。

推薦にあたっては、個人・団体ともに自薦、他薦を問わず、随時受け付けることとしているが、選考委員会では、その内容を審査のうえ、「東京大学総長賞」として相応しいものを決定する。

このたび、以下のとおり推薦基準がまとめられ、推薦の受付を6月17日(月)から開始した。

表彰の実施時期は、原則として9月及び3月としているが、その内容で選考委員会が特に必要と認める場合には、その都度実施する。

第1回表彰は、9月初旬までに推薦のあったものから選考され、候補者推薦書(別記様式1・2は、東京大学ホームページをご覧ください。)を学生部学生課教養掛(内線22529)まで提出することになる。

なお、表彰式は10月8日(火)を予定している。

東京大学学生表彰「東京大学総長賞」の推薦基準

- 1 学業において、研鑽に励み、他の学生の範となった個人若しくは団体又は学界等により優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体
- 2 課外活動において、国内外の各種スポーツ、競技、演奏、展示、発表等で優秀な成績を収め、本学の名誉を高めた個人若しくは団体又は課外活動を支援し、課外活動の充実と振興に著しい貢献をした個人若しくは団体
- 3 環境保全、災害救援、社会福祉、青少年育成、海外援助協力等の各種社会活動において、活動実績が認められ、他の学生の範となった個人若しくは団体又は社会的に優れた評価を受け、本学の名誉を高めた個人若しくは団体
- 4 大学間の国際交流において、相互理解と友好関係を深め、本学の国際交流の発展に著しい貢献をした個人又は団体
- 5 その他、これらに準ずるもので、「東京大学総長賞」に相応しい貢献があった個人又は団体

(学生部)

本学名誉教授懇談会開かれる

6月4日(火)午後5時30分から山上会館において第13回目の本学の名誉教授懇談会が開かれた。

本学名誉教授1,303人のうち155人の方々が出席され、学内からは佐々木総長をはじめ各部局長等の関係者多数が出席した。

懇談会は、佐々木総長の挨拶の後、名誉教授を代表して宇宙科学研究所(旧宇宙航空研究所)の高木昇名誉教授(93歳)の挨拶、続いて小間副学長の発声で乾杯があり、終始なごやかな雰囲気で行われ、廣渡副学長の閉会挨拶をもって午後7時散会した。



懇談会で挨拶をする佐々木総長



高木昇名誉教授



懇談会の様子

第1回東大ホームカミングデイ開催される

去る6月8日(土)に、東京大学同窓会連合会(会長向坊隆氏)主催による「第1回 東大ホームカミングデイ」が、約600名の卒業生が参加して、本郷の安田講堂で開催された。

従来、東京大学の同窓会は、各地区、学部別等にて組織しそれぞれ活動していたが、平成9年に各同窓会組織が一同に会して「東京大学同窓会連合会」を結成し、全国の同窓生に呼びかけ、このたび第1回の開催となったものである。

当日は、午後1時から同連合会会長代理として石川六郎氏の挨拶、「これからの東大を展望して」と題して佐々木毅東京大学総長の講演、「日本のこれから、日本人のこれから」と題して藤原正彦お茶の水女子大学教授の講演があり、最後に応援部OBのリードで、参加者全員で本学の応援歌「ただ一つ」を懐かしく斉唱し、講演会を終了した。

午後3時から、安田講堂内及び各部局の協力により総合研究博物館、総合図書館、法文1号館25番教室、史料編さん所、東洋文化研究所等の学内施設を見学した後、講堂前地下食堂において懇親を深め、数十年振りに会う同窓生同士、昔話に大いに花が咲いていた。



石川六郎連合会会長代理挨拶



ホームカミングデイ 講演会の様子

≡ 一般ニュース ≡

事務職員海外研修報告

本学では、全学協力基金により国際交流に熱意のある事務職員を長期間海外に派遣する研修制度をもっているが、平成13年にこのプログラムで派遣した4名から研修についての報告書が提出されたので供覧するとともに、今後、当制度での海外研修を目指す職員の参考としたい。

長期海外研修を終えて

総務部総務課広報掛

岸野幸子

(カリフォルニア大学ロサンゼルス校)

はじめに

私は、「東京大学国際交流担当職員在外研修（長期）」プログラムで、2001年3月23日から2002年3月22日までの1年間、カリフォルニア州ロサンゼルスに滞在しました。以下、ロサンゼルスでの生活、前半の語学研修、及び後半の実務研修について報告させていただきます。

ロサンゼルスでの生活

アメリカ合衆国西海岸最大の都市ロサンゼルス（Los Angeles County = Greater Los Angeles）は、88の市（Los Angeles Cityはその中の一つ）からなる広大な地域で、関東平野に匹敵するほどの広がりを持っています。そのうち私が滞在した場所は、観光地として名高いベイエリアのサンタモニカと、UCLAのある学生街ウエストウッドでした。最初の半年間は、サンタモニカにある白人系アメリカ人のお宅でホームステイをし、残りの半年間は、UCLAの近くにアパートメントを借りて暮らしました。

ロサンゼルスでの暮らしで一番気にならなければならないことは、なんといっても治安です。広いロサンゼルスの中には、閑静な高級住宅街から昼間でも歩くのが危険といわれる地域まで様々あります。また、人種や経済状況によって、住む地域に偏りがあるのも特色です。私が滞在した地域は、比較的安全で暮らしやすいエリアでした。

広大で、要所要所が分散しているロサンゼルスでは、移動手段として車が必要不可欠です。運転免許を持たない私は、交通の手段として常にバスを利用していました。サンタモニカのホームステイ先から、UCLAに附設された語学学校まで通うのに、片道1時間近くを要し、また、バス停から家までの道のりが人気の少ない暗い道だったこともあり、安全性と利便性を考えた上、UCLAでの実務研修が始まる10月を前にウエストウッドに引っ越すことにしました。

半年間、生活をともにしたホストファミリーご夫妻は、

かつてご自身達が語学留学を経験したということもあり、留学生である私の気持ちをよく理解し、常によき相談相手となってくれました。趣味のガーデニングやハイキング、親戚を交えてのホームパーティーなど、アメリカの文化等を肌で感じる事ができた貴重な半年間でした。ホームステイは、その家族の考え方や性格等によって生活の快適さが左右されます。ファミリーとの相性が悪く、トラブルが絶えないために、契約期間半ばにしてホームステイをやめてしまった友人を幾人が目にしました。その点、私はファミリーに恵まれ、とてもラッキーだったと思います。彼等とは今でもメールを通じて互いの近況を報告しあっています。

語学研修

渡米直後の3月下旬から、実務研修が始まる10月までの約半年間、UCLAに附設された語学学校（UCLA Extension American Language Center）で英語を学びました。語学学校のプログラムには、主に大学や大学院への進学を希望する人のためのAcademic Intensive English Program、英会話のスキルを向上させるためのPractical English Program、ビジネスを学びたい人のためのPractical English for Business Programがあり、私は半年間でこれら全てのコースを受講しました。

語学学校には、日本人をはじめ、韓国人、中国人、台湾人等、多くのアジア人留学生が在籍しています。我々アジア人は、文法や読解力の点では比較的高いレベルにあるものの、中南米やヨーロッパ系の学生に比べると、会話力（ヒヤリングとスピーキング）の点で、やや劣っています。また、文法のクラスでも、答えはわかっているのに、その解説を英語で求められると、答えに窮してしまうというジレンマにもよく陥ります。渡米後まもない頃、日本で学んできた英会話が思うように活かせず、毎日のように自己嫌悪に陥り、ひどい時には言葉そのものがなくなることもありました。

語学学校は、所詮、リアル・ワールドではありません。学校で留学生同士が話す英語も、一歩外に出ると全く通用しないということがよくあります。実際の社会では、語学学校の先生のように、ゆっくりわかりやすく話してくれる人も、たどたどしい英語を親切に聞き取ってくれる人もいません。とはいえ、語学学校で基礎を学ぶことは重要です。大切なのは、できるだけ多く外の世界に出て、生の英語に触れることだと思います。

実務研修が始まってからは、UCLAの学生に家庭教師になってもらい、空き時間を利用して英語を勉強しました。フリートーク、英作文の添削、新聞の記事やコミック等で意味がわからない部分を解説してもらうなど内容は様々で、週に2～3日、1回1時間の割合でレッスンを行いました。語学学校での勉強は受身になりがちですが、マン・ツー・マンで行うこのプライベートレッスンは、自分から積極的に発言し、込み入った質問をするなど、たいへん充実した内容の濃いものでした。

この他、英会話の勉強として、また趣味の一環として、

アートのクラスに参加しました。先生も生徒も全員ネイティブスピーカーという過酷な状況の中でも、自分の好きな分野に関しては互いに通じ合えるものがあり、とても自然な形で英会話の勉強ができたと思います。

語学力は、階段式に向上していくものと言われる。勉強しても一向に伸びない水平の状態が続いたあと、突然相手の話が聞き取れ、それにテンポよく返答している自分がある、つまり垂直にぐんと伸びる時期がくる、そのあと伸び悩みの時期が続き、再びぐんと成長する、その繰り返しだと思います。そしてこの階段は、ネイティブスピーカーでない私達にとっては、果てしなく続くものだと思います。

実務研修

2001年10月1日からの約半年間、UCLAのEAP (Education Abroad Program) オフィスで実務研修を行いました。EAPIは、カリフォルニア大学全キャンパス (Berkeley, Davis, Irvine, Los Angeles, Riverside, Santa Barbara, Santa Cruz, San Diego, San Franciscoの計9校) を通じて運営されているUCの学生のための交換留学プログラムで、世界34カ国におよそ100の協定校を有し、UCLAだけでも年間300人、UC全体では2000人近くの学生が、毎年このプログラムを通じて海外留学を果たしています。

EAPIは、各キャンパスに設置されているオフィスと、本部にあたるUniversitywide Office of EAP (UOEAP) のほかに、協定校のある国にStudy Center等を設けています。各キャンパスのEAPオフィスでは、募集、選抜、オリエンテーション、学務的な指導のほかに、帰国した学生へのサポート(卒業や就職に関する指導を含む)を行っています。一方、UOEAPでは、渡航先でのハウジング、ピザ、健康管理、単位互換の事務手続き(留学先で取得した単位は、一定の条件でカリフォルニア大学の単位として認められ、卒業に必要な単位として加算される)、財政的援助などの事務を総轄しています。そして、各国のStudy Centerでは、当地を訪れた学生を全面的にサポートする役割を担っています。

UCLAのEAPオフィスは、1人のディレクターと4人のカウンセラー、事務助手及びEAPを通じて海外留学を経験した学生インターン数名によって構成されています。私がEAPのオフィスで携わった業務は、閲覧資料の整理、申請書類の受付と集計、説明会のための資料作成、オフィスにきた学生への対応等でした。また、アジア諸国を担当するカウンセラーの計らいで、日本の大学へ留学を希望する学生の面接会場に同席させていただき、学生にいくつか質問する機会を得ることができました。

実務研修が始まる4ヶ月前、年に一度行われるEAPの全体会議 (UOEAP Annual Conference 2001) に参加する機会がありました。UOEAPと各キャンパスのEAPスタッフがサンタバーバラにあるホテルに参集し、4日間泊り込みで行われました。当時、EAPについてなんの知識も無く、自分の英語にも全く自信がなかった私は、

小心翼翼とした態度でその数日間を過ごしました。実務研修開始後も、オフィスにいる間は常に緊張の連続で、スタッフとのやり取りはもちろんのこと、学生との対話や電話の対応には、いつも冷汗三斗の思いをしました。この実務研修を通して最も印象に残ったことは、スタッフの学生に対するフレンドリーな対応でした。スタッフと学生との間に隔たりは無く、オフィスは常に開放的で暖かい雰囲気満ちていました。その場限りの事務的な対応はせず、質問に訪れた学生一人一人に対し十分な時間をかけ、親身になって相談にのるスタッフの姿が今でも目に焼きついています。同じ大学事務に携わる者として、見習うべき姿であったと思います。

おわりに

9月11日の朝、いつものようにラジオを聞きながら身支度をしていると、突然、ブッシュ大統領の演説が始まりました。なにやら、テロについて喋っているようでしたが、詳しい内容は理解できませんでした。その直後、語学学校の友人から電話があり、ニューヨークのワールド・トレード・センターとワシントンの国防総省(ペンタゴン)に飛行機が撃墜したらしいと聞かされ、すぐさまテレビをつけました。その映像はまるで映画のワンシーンのようであり、とても現実のものとは思えませんでした。ちょうどその日は、折悪くホストファザーが出張先のニューヨークからロサンゼルスに戻ってくる日でした。国内全ての空港が閉鎖され、飛行機の運行は全面ストップ。ホストファザーが無事帰宅するまでの数日間、家の中は緊迫したムードに包まれていました。

この同時多発テロ事件の後、アメリカ国内では“God Bless America.” “United, We stand.” などといった言葉が叫ばれ、街中至るところに星条旗が掲げられました。テレビやラジオでは、連日のようにこの事件が取り上げられ、“New War” という言葉まで使われるようになりました。

この事件をきっかけに、アメリカという国の様々な側面を垣間見ることができました。テロ後放映されたテレビCMの一つに、人々が“I’m an American.” というせりふを次々口にしていく印象的なCMがありました。この国の人々は、自分が「アメリカ人」であるということに強い自信と誇りをもっているように思います。それが愛国心へとつながり、いざという時に強い団結力を見せる、文字通りUnitedの国だと思います。様々な国の移民が集まって構成されている多民族国家だからこそ、かえって一丸となり、強大なパワーを発つ。ひるがえって、われわれ日本人はどうでしょう。自分のナショナリティーにどれだけ自信と誇りを持っているでしょうか。一つにまとまっているようで、実はバラバラなのではないでしょうか。アメリカで過ごしたこの一年は、日本という国について考えるいい機会でもありました。

最後になりますが、私にとってこの海外研修は大きなChallengeであり、自分を再発見するためのVoyageでした。このような好機を与えて下さった皆様、お世話して



UCLAのオフィススタッフと(右端)

下さった全ての方にお礼申し上げますとともに、この経験を今後の仕事に活かすよう努力したいと思います。

アメリカでの長期海外研修を終えて

研究協力部国際交流課

関 口 健

(カリフォルニア大学サンディエゴ校)

1. はじめに

近年日本を取り巻く世界情勢は大きく変化し、日本国内の社会構造も変化してきた。それに伴い日本人の国際観、世界に向けた目も変わっていったと思う。学生が、語学留学等も含め海外の大学に留学するケースは珍しくなくなった。企業も今までの日本型の経営理念では対応しきれなくなったこの時代に、多くの社員を海外に送り込んでいる。または全く個人的に海を渡り、日本を離れ何かを成し遂げようとする人も多い。しかし自分に関して言えば、正直“1年”という期間を海外で生活することはまったくの夢であった。それでも多くの方々のサポートや、また幸運にも恵まれ、今回の東京大学職員在外研修(長期)が現実のものとなった。この研修を終えた今、1年という限られた期間で自分がどれだけ成長できたのか、メインの目的である語学学習はどうだったのか、アメリカをどこまで深く理解できたのか、そして自分なりの国際感覚というものは養えたのかなど自分に対する問いかけも多い。正直それに明確に答えることは難しいが、私がこの研修で体験したこと、感じたことなどを簡潔に紹介させていただきたいと思う。

2. サンディエゴ

私はこの研修で平成13年3月25日から1年間、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンディエゴに滞在した。サンディエゴは西海岸の大都市ロサンゼルスから南に200kmほど下ったところに位置し、メキシコとの国境に近い。私の住んでいたところから車でフリーウェイを40分も行けば、そこはもうメキシコである。したがって、

サンディエゴの街にもメキシコ人が多く見受けられ、文化的影響も大きい。たまにメキシコ系の飲食店などで英語が通じないこともあった。気候に関して、渡米前、無知な私は常夏をイメージしていた。日中は確かに日差しも強くて暑いが、夕方から夜にかけて夏でも肌寒くなることもある。この点は予想外だった。それでも、雨は年間を通してほとんど降らず、湿度も低いので全体的にはカラッとした気持ちよい気候だった。

一口にアメリカ又はアメリカ人と言うには、アメリカは大きすぎ、人々は多様すぎる。日本という単一民族国家で育った私にはすべてが新鮮だった。特に私が過ごしたカルフォルニア州は、全世界からの移民によって文化、言語、人種が融合された独特の雰囲気を持つ州である。サンディエゴでは人々はリラックスしており、外からのものを比較的抵抗なく、受入れているように感じた。また平日の日中にビーチでのんびりとくつろぐ人々を見て、いったい彼らはどうやって生計を立てているのだろうと疑問を抱く反面、心に余裕を持たずあくせくしがちな日本人は、本当に幸せな生活を送っているのだろうかとも感じた。サンディエゴはそんな自由な雰囲気が漂うカルフォルニア州の一都市だった。

3. 語学学校

カリフォルニア大学サンディエゴ校(通称UCSD)で1年間に渡り語学研修を行った。UCSDの中には「UCSDエクステンション」という組織が独立して存在しており、人文科学(語学含む) コンピューター、ビジネス、エンジニアリングなどの資格プログラムを社会人、留学生など多くの人々を対象に展開している。私が通った語学学校はこのUCSDエクステンションの一つのプログラムであり、English Language Programs(ELP)と呼ばれている。このELPは4週間、10週間の語学学習得コースがメインとなっている。私はこの10週間プログラムを4学期に渡り受講した。

クラスは大まかに3つで構成されている。コアクラス(10週間を通じて基幹となる英語の総合的学習を目的としたクラス) 文法クラス、そして生徒の興味に対応する選択クラスである。私は最初の春学期をコアクラス104(中級レベル)からスタートし、毎学期ごとにレベルを一つずつ上げて、最終の冬学期を107で終了した。(クラスレベルは99~109まで。)

初めの頃の授業はインストラクター主導で、英語での表現を覚えたり、日常の場面を設定して会話を行ったりという基本的なことが主な内容だった。それでも入学当初、相手の言っていることが理解できず、また自分の言いたいことも旨く伝えることができずに戸惑った。研修も後半からは授業によってはプレゼンテーションの機会が多くなった。プレゼンテーションは明確なコンセプト、興味を引くような内容、表現力などがなければ発表全体がぼやけてしまう。これは日本語で行ってもとても難しい、事前に十分な準備が必要であった。これを英語で行うことは自分にとって大変勉強になった。資料集めか

ら始まり、提示資料の作成、発音練習など準備は尽きなかった。私の場合、日本語でも人前で話すのに不慣れだったため、緊張してしまいせっかく準備したことを十分に伝えられないこともあった。また発音上の問題で、内容を聞き取ってもらえないこともしばしばだった。そのため聞き手からの評価はいつも厳しかった。(基本的にプレゼンテーションの後、インストラクターとクラスメイトから評価表を受け取る。) 終了後はプレゼンテーションが終わってスッキリしたと言うより、劣等感を感じるの方が多かった。しかし、こういった経験を何度もすることで、人前で論理的にものごとを伝えていくという過程には慣れたと思う。これは単に英語習得という以上に、貴重な経験をしたと思っている。

具体的には、ビジネスのクラスで、企業家を紹介するプレゼンテーションがあった。私は世界を代表する企業「Sony」の創設者である盛田昭夫氏を紹介した。発音の練習を十分出来なかったので、ところどころで止まってしまう。しかし概ねのことは理解してもらったようだった。終了後、珍しくあるクラスメイトから興味深いプレゼンテーションだったとコメントをもらった。彼女はソニーの名前は知っていても、日本の企業であることは知らなかったらしい。そして特に、ソニーがいかにしてアメリカでの販売経路を切り開いたのかという点に興味を示していた。ソニー製品はアメリカでとにかく人気がある。数年前にはコカコーラやフォードといったアメリカを代表する企業を押さえて、アメリカ消費者にもっとも知られている企業として選ばれている。また雑誌タイムは、20世紀で世界にもっとも影響を与えた企業家20人の一人として、アジア圏から唯一盛田氏を選んだ。このような課題を通じて、様々な国の人々と情報ができたことはとても有意義なことだった。

10週間のプログラムが終了すると、毎回卒業式が行われる。各クラスの代表が簡単なスピーチを全生徒、インストラクターの前で行う。最終学期に私はこのスピーカーになった。プレゼンテーションとは違うので、とても短いし、くだけた内容で話を進めることができるが、それでも200人くらいの人の前で話すのは恐怖だった。緊張からか、その朝ビールを少し飲んでしまい、実はある程度気持ち良かった。幸いみな楽しんでくれたらしく、スピーチのあいまに何度も笑い声が聞こえた。終了後、とても面白かったとインストラクターや友達からの声をもらい、正直うれしかった。この日は私の帰国前日であった。つまらないことも知れないが、この小さなスピーチがある程度思うようにいったことで、自分の中でわだかまっていたものがほんの少しだけ晴れた気がした。これは私の滞在期間中、うまくいった最初で最後のスピーチとなった。

4. ホームステイとアパートでの暮らし

最初の半年はホームステイを体験した。一緒に暮らしたのはごく一般的な白人系アメリカ人家族だった。家族構成は父親、母親そして娘さんだった。また私の他にブ

ラジルから来た学生が同居していた。父親は保険会社に勤務し、週に一度は聖書の勉強会に通うとても穏和な人だった。母親は専業主婦で、私のつたない英語を根気強く聞いてくれた。娘さんは日本で言えば中学生で、この年齢の特徴としていつも電話をしており、家族との会話はあまり多くなかった。

アメリカでホームステイという制度はかなり一般的で、多くの家族が海外からの学生を積極的に受け入れている。住んでみての感想は、もちろんホストファミリーによるし、生徒自身の性格にもよる。寮やホテルではないので二つとして同じ印象はないと思う。ホストファミリーも全くのビジネス感覚で生徒を受け入れる場合、生徒との交流を重視し、家族ぐるみで付き合っている場合など接し方も様々である。私のホームステイ先はその中間くらいに位置している印象だった。もう5年以上も継続的に生徒を受入れているので、生徒の扱いにも慣れており、必要に応じてお世話をするという感じで、いい意味でも悪い意味でも、生徒を特別扱いするということとはなかった。私の質問などにも、疲れているときはハッキリと「明日にしてほしい」と言うし、次の日になれば気さくに対応してくれた。また母親は生徒たちの率直なアメリカ観を聞くのが好きで、日米間の歴史などの話題にも特に気まずい雰囲気もなくオープンに話すことができた。この話題では、よく日本で経験するような「相手は内心どう思っているか分からない」という感覚は、お互い余り持たなかった。これはアメリカ人の言いたいことは率直に主張するという個人主義的感覚に、自分が慣れ始めたからだと思った。

そうとは言え、最後までホストファミリーと友達感覚で付き合うことが出来なかったことが少し残念だった。これは私の性格と英語力が影響していると思うが、こちらから話を切り出すとき変に気を遣ってしまい、どこかで遠慮しているような感じだった。私の態度が相手にも微妙に影響してしまったと思う。やはり、ホストファミリーと過ごすからには積極的にこころを開いて、多少勘違いされても自分の気持ちを素直に表現することが大切である。日本的な発想は捨てるべきである。そして、いつも冗談を交えた明るい態度が人間関係には必要であると感じた。こういったコミュニケーションを通じてアメリカ文化、英語を吸収出来れば理想である。

その後、UCSD学内で偶然知り合った同い年の研究者とアパートを借りて住んだ。アメリカでは大きなアパートに何人かで住むことは非常に一般的である。キャンパスの掲示板にもルームメイト募集の広告が多く貼られている。生活費を節約する目的もあるだろうが、ルームメイトを選ぶのもそれほど真剣なわけではなく、割り切っている様子である。アメリカでは、ホームステイにしてもそうであるが、まったくの他人と生活を共にすることあまり抵抗がない。これは日本の生活様式と大きく異なる点だと感じた。私の場合、同年代の友達(日本人以外)と気兼ねなく英語を話せる環境が欲しいというのが選んだ理由だった。私のルームメイトはロシア人であるが、

約8年前にカナダに移住し、カナダ人となった。現在はUCSDで天文学の研究者として勤務している。もちろん英語には全く問題なく、私にとって幸運だった。彼は日本にとっても興味があり、日本語を勉強していた。そんな関係もあって一緒に住む前は、よく二人で勉強会を設けていた。時間を決めて日本語と英語を教え合うのである。一緒に住んでからは学校のお互いの課題などを助け合った。それでも、二人とも英語または日本語を思うように操れなかったし、映画やドラマがスッパリと理解できず、焦ったりした。ある日、「1ドルを賭けて、3ヶ月後にどちらが先に語学を完全にものにできているか競争しよう。」と自分たちにプレッシャーを与えたが、金額が低すぎたのかいつの間にか賭け自体を忘れてしまった。うまくいったこと、いかなかったことを含めて、異国の地で生活文化の違う人と友達になり、半年を一緒に過ごしたことは、貴重な体験だった。

5 . ボランティア活動、シリコンバレー訪問

秋学期の間、大学の近くにあるScrippsという病院でボランティア活動を行った。UCSDの学生達で組織されている「ボランティア・オフィス」を通じて紹介してもらった。自分が大学生の時、ほとんど興味がなかったのが日本の大学での詳しい事情は知らないが、ここでは大学が受け持つ様々なボランティアプログラムが存在しており、各プログラムを数名の学生が担当し、応募者を募っている。その他にはサンディエゴ市内のボランティア団体からのパンフレットをファイルし、誰でも見られるようにしてある。興味があったら直接団体とコンタクトをとる仕組みになっている。こういった充実したシステムを見て、アメリカにおけるボランティア精神の成熟度を感じた。私は大学が受け持つプログラムをとることにした。当初、子供と接するのが好きなので、子供たちと遊べる機会のあるボランティアを希望した。しかしメインの目的は、学校の授業についていけない子供たちに勉強（特に数学、理科）の補助を行う内容だった。私には少し無理だと思い、病院の方で活動することにした。紹介してもらったところは病院というより老人ホームに近かった。患者さん全員が車イスを利用しており、半数以上の方は痴呆症に近い状態だった。また圧倒的に女性が多かった。私の役割は日ごとに行われる様々な活動（私の担当の曜日は、オルガン演奏者が訪問し、皆で演奏を聞き、歌を歌う日）の場所にご老人を連れて行って参加してもらうことと、朝食後の自由時間にいっしょにパズル、ブロックをしたり、話をしたりすることだった。自分があまりアメリカ社会に溶け込んでいる気がしなかったため、アメリカで盛んなボランティア活動を経験してみたいと思ったのが第一の動機だったが、正直なところ、少しでも英会話の練習になればとも思っていた。しかしたいいてい人は車イスの上で半分寝ているような感じで、ほとんど会話にはならなかった。名前を言っても通じないし、名前を聞いても反応が余りなかった。（私の発音にも問題があったと思う。）何か私に要求し

ているのだが、唸っているような感じで何を言っているのかさっぱり理解できなかった。初日は大変戸惑った。やっていけるか不安だった。しかし回を重ねるごとに、ボランティアの目的は、援助を必要としている人に同等の立場で接して、お互いが影響し合うことなのだという単純なことに気がついてきた。その後は患者さんと接する時は何でもよいから話して、通じなかったらただ笑顔でいた。ほとんど通じないので、ずっと笑っている状態だった。

ボランティア中にふと客観的に「この方々は若いときどんな生活を送っていたのだろうか？人の一生はこのような形で終わって行くのか？年を重ねるごとに体の自由が利かなくなっていくのは、正直怖い。」などと、いろいろ考えてしまうこともあった。しかし、ここで活動させてもらったことは、いろいろな意味で良い経験になったし、笑っていることで、自然と自分の気持ちも明るくなった。大きな手助けはできなかったが、ボランティア精神の一部を学んだ気がする。そしてなにより、この病院にいた患者さんは私のことを覚えていないと思うが、私にとってはとても魅力的な方々だった。うまく表現できないが、みんな“可愛い”人たちだった。（実は帰国の前夜、こっそりこの病院を訪れて懐かしい面々を拝見したが、やはり私のことは覚えていなかった。でも本当に微笑ましい人たちだった。）

語学学校は各学期の合間に休暇がある。秋学期終了後にカリフォルニア州、サンタクララ郡を中心として広がる世界的に有名な最先端技術の拠点、“シリコンバレー”を訪問する機会を頂いた。有名なスタンフォード大学もこの中に存在しており、この地域発展の強力なバックボーンとなっている。このシリコンバレーで、東京大学シリコンバレーオフィス(SVOUT)、IMCA AMERICA, INC(ヘッドハンティングの会社)、スタンフォード大学、International Business Incubator(ベンチャービジネス立ち上げのための会社)など様々な施設を訪問させていただいた。紙面の都合上それぞれの詳しい紹介は省略するが、私がこの地区を訪問して感じたこと、聞いたことは、日本の大学が真の意味で世界に通用する大学になるには、大学の外で動いている世界の流れに目を向けて、それに合った改革をする必要があるということだった。アメリカの大学には、ある種企業的な経営理念がある。大学を合理的、効率的にマネジメントできる経営集団を組織しているように感じる。これが大学の自立にもつながっている。これから、日本の国立大学はいよいよ国立大学法人化へと向けて大きく動き出す。産学連携一つをとっていても企業と対等に渡り合えるしっかりした経営組織が必要であろう。また、これからの競争相手は日本国内だけでなく世界の大学へと広がっていく。その中で従来どおりの日本人による日本人のための大学運営で、どこまで通用するのは疑問である。日本の大学が今後世界に開かれた大学として変わっていくためには、大学を構成する人材一人一人に、従来の大学の枠組みの中からではない、バランスのとれた国際的視野も必要だと

思った。そして外に向かって積極的に発信する力強さが必要になると感じた。この訪問では医科研新井所長をはじめ多くの方々に大変お世話になった。そして貴重なお話を聞かせていただいた。この場をかりてお礼を申し上げたい。

6 . 終わりに

当初この1年間を、ある程度長い、まとまった期間だと思っていた。しかし、実際は本当にあっという間で、驚くほどの早さで過ぎて行ったというのが正直な印象である。それでも今思えばいろいろなことがあった。その中でも9 . 11の米国多発テロは世界に大きな衝撃を与えた。私も朝起きて目の当たりにしたあの光景を今でも忘れられない。そのときのホストマザーの涙も心を深く打ったし、テロ後訪れたシアトルで、犠牲者のための哀悼集会に偶然参加した時には、アメリカ人の愛国精神を体で感じた。

冒頭でも述べたとおり、自分がこの研修でどの程度の結果を残すことができたのか、と自分自身への問いかけもある。仮に英語がネイティブスピーカーのように“ペラペラ”になったのであれば、それは大きな財産である。私の場合残念ながらそこまでには至らなかった。しかし異国の地での生活を通じて大学職員として又は一個人としてどのくらい成長できたのかも同じくらい重要なことだと感じた。それは今後の職務の中で自覚し、生かしていかなければならないことだと思う。今後法人化が進んで行き、否が応でも大きな変化が訪れることは必須である。一個人の力だけで大きなことはできないが、自分が担当する業務を行う中でも、今回の研修で感じたこと、教えていただいたことを常に頭に入れておきたい。そして「これからの大学事務、大きくは運営、において今自分ができることはなんなのか」という意識を忘れずに取り組んでいきたい。

最後に、今回の貴重な機会を与えて下さったことに、言葉では言い表せない感謝をしている。東京大学及び派遣前、派遣中に誠心誠意私をサポートしてくださった全ての方々に感謝の意を表したい。この研修で自分なり感じたこと、得たことを職務の中でフィードバックさせて、



UCSDキャンパスでクラスメートと(上段左端)

より良い仕事をしていくことが私の責務だと思っている。

イギリスでの長期研修を終えて

情報基盤センター総務掛

松本 憲 始

(ウォーリック大学)

私は、平成13年9月28日から平成14年3月22日までの約6ヶ月間、東京大学国際交流担当職員在外研修(長期)のため、イギリス(イングランド)のウォーリック大学において語学研修を行う機会をいただきました。以下、その報告を述べていきます。

1 . はじめに

私は、イギリスへ行くのは初めてでした。それどころか、この研修への参加が決定するまでは、地図も見たことが有りませんでした。そのような状況から、不安と期待が半々ずつ入り交じっていた感じでした。私が滞在したウォーリック大学は、ロンドンから列車で北西へ約1時間15分程のコベントリー駅にほど近い所にキャンパスを構えています。ちなみにコベントリーは、自動車産業の街として有名です。また、コベントリーFCもあり、現在はプレミアシップから脱落していますが、フットボールクラブを持つ街でもあります。大学は、イギリスには珍しいグリーン・キャンパスで、郊外の広大な敷地からなります。また、歴史が古い大学が多いイギリスにおいて、創立は1965年と新しいですが、イギリス国内の大学において、高いレベルでの確固たる地位を築いており、専攻によってはイギリスNO . 1の評価を受けているものも有ります。大学のまわりには、緑の芝のグラウンドが多くあり、土やアスファルトの上でスポーツをやってきた私から見ると、非常に羨ましい環境が整っておりました。私が滞在したのは秋から春にかけてでしたので、非常に日の短い期間であり、これもまた貴重な経験でした。

2 . 語学研修

私が入学したコースは、Intensive Course English of Business Classといい、経済・経営系の大学院(MBA等)進学のためや、企業等のビジネスシーンにおいて有用な英語の習得を目的とするコースでありました。クラスには、中国、韓国、香港、イタリア、カザフスタン、リビアの各国人、つまりアジア、西欧、東欧、アフリカと多くの地域から生徒が集まり、バラエティーに富んだクラスで、海外の語学学校でなければできない、貴重な体験となりました。授業は、週24時間のハードなカリキュラムが組まれた上、授業時間以外にライティングやリーディング等の宿題をこなす毎日、かなりハードな語学研修となりました。授業の内容は、英語を読む、書く、聞く、総合力等の授業で構成されており、英語漬け

の毎日をおくることとなりました。特に印象に残った授業は、Integrated Studies, Business, Listening & Speaking, Reading及びStudy Skill & Examination Practiceの授業で、内容を大まかに記述します。Integrated Studiesの授業は、英語の総合力を高めるためのテキストを使用して特定のストーリー（例えば洋上殺人事件の犯人は誰だ等）を読み、各生徒が思った犯人を、何故そう推理するかということ进行讨论することで、生徒の語学表現力や想像力を磨く内容のものでした。Businessの授業については、内容がマーケティングやミニMBA（経営学修士コース）のような色彩が濃く、また、テクニカルタームが授業中に頻繁に使用されました。その結果、その方面に明るくない私にとって授業に着いていくのは非常に難しかったです。Listening & Speakingの授業は、主にビジネスシーンを題材にした聞き取りと会話が中心の内容でありました。例えば、顧客との電話での対応、企業内での社員との対応等のロールプレイングが行われました。Readingの授業は、1回の授業におけるテキストの量が多く、ひたすら読む作業が続く内容のものでした。しかしながら、どのようなテクニックで読解すれば、効率よく読めるか、また、十分に内容を理解することができるかなどの方法論も学び、そのおかげで、英語の読解力がかなりつき、新聞や小説などの読書をするのが苦ではなくなりました。Study Skill & Examination Practiceの授業は、ビジネスの内容と一般的なテーマを交互に取り上げるという方針のもとで、ビジネスでは、ユーロ導入の可否について、新しい工場を立ち上げる場所の検討など、経済・経営上の問題を考えさせ、生徒同士で討論させることが多かったです。また、一般的なテーマは、北アイルランドの首都ベルファストにおける宗教上の対立問題のビデオ鑑賞、ホームページ検索の仕方、クイズやカードゲーム等、バラエティーに富んだ授業が行われました。ちなみに、この授業は、金曜日の午後ということで、週最後の授業であり、飽きさせないようにとの配慮もありました。

この授業全体を通して言えることは、丁寧な表現を身につけさせるという意図があると思いました。つまり、子供が使う言葉でなく、大人が使う言葉の習得。当然それがビジネスシーンで役立つというわけです。具体的には、電話の対応の仕方、ビジネスレターやファックスの書き方、会議の進め方などに加えて、読解や文法等の基本的な学習もありました。なお、先生方は、イングランドとウェールズ出身の先生が担当しており、先にも言いましたが、英国の歴史や分野について、およびユーロの導入について等も授業で扱われ、先生方が日常の生活で感じたり考えたりすることを直に聞いたのは、英国の文化を知る上で、非常に有益でありました。また、タームの最後にはプレゼンテーションがあり、各自テーマを選定して発表を行いました。私は、日本の大学生の就職についてのプレゼンテーションを行ない、日本の大学生が就職活動時において、在学している大学名における有利、不利を、自分なりの観点からプレゼンテーションし、日

本の社会における実態の一部を、他国の人に理解していただきたいという一心で行いました。

また、授業を通して感じたことは、とある事象に対する自分の意見や国の状況等を発言させられる機会が多かったです。これには、スポーツや宗教やマスコミ、政治経済、人々の気質等様々な分野に及びました。このことを通じ他国の文化と比較することで、自己の文化を再確認するなど、貴重な体験となりました。これは、今までの人生経験では体験していないもので、従来は考えていなかったことが問題意識となり、また、新たな発見となり、メディア上でしか得ていなかった知識が、現実に再確認出来たことなど、様々な方面に及びました。ちなみに、特定の事象についての発話となると、どうも日本人は他の国の人たちと比較して、毅然と答えられないことが多かったのです。例えば、労働組合における日本の現状、日本人の時間外労働は何故多いのか等については、ほとんど答えることが出来ず、日頃の問題意識の薄さに恥ずかしさを感じました。

その他、授業の一環として、オックスフォードとケンブリッジへの1日研修のような催しもありました。これは、いくつかの選択肢の中から生徒にアンケートを取り、行き先を決めて行われました。オックスフォードでは、ボードリアン図書館や大聖堂、カーファックス・タワーなどの歴史的建造物を見学しました。その後、先生方に連れられ非常に歴史のあるパブへ行き、是非食べると勧められたビーフパイを食べ、イギリスの食文化を体験しました。ケンブリッジでは、キングスカレッジなどのいくつかのカレッジを見学し、ケンブリッジプレス直営の書店へ行き、英語学習のためのテキストを数冊買いました。そしてここでも有名なパブへ行き、その雰囲気を楽しみました。ちなみに、イギリスを語る上で、パブは重要な場所であり、パブではその街の雰囲気が伺える気がしました。イギリスの文化に触れ、様々な場所で現地の人たちと会話することなどが、この研修の目的だったのではと感じました。

3. 生活の中から

まず住居ですが、学内の寮と学外のアパート等の選択ができました。私は通学の至便を考えて学内の寮に住みました。私が住んでいた寮は、1部屋につき1名の寮で、ユニットバス完備の大変居心地の良い住まいでした。寮はフラットに分かれており、1フラットに8名が住み、1つのキッチンシェアするシステムでした。

食生活についてですが、渡英直後時差ボケが1週間程取れず、しかし授業は始まったため、今まで経験したことのない疲れを味わいました。そんな中、食事を作る気が全くせず、朝はサンドイッチ、昼は学食、夜も外食がサンドイッチという生活が習慣付いてしまいました。その結果、渡英後約3ヶ月の間に3度の発熱を起こし、辛い思いをしました。また、現地の牛乳が合わなかったようで、何度も腹痛を起こしました。そのような経験から改心して、途中から極力食事に気を遣うことにしました。

クラスメートの中国人やイタリア人からその国の料理を習って作ったり、また、日本人同士でも料理を作りあって食べたりして、食生活の変化と共に体調も維持出来るようになり、色々な場面で生活も充実してきました。

別の角度からの食事の話として、「食は文化」と言われますが、知ってはいたことですが、国や地域、宗教などの違いから、当然のようにもの凄い違いを目の当たりにしました。一番印象に残ったことは、クラスメートのリビア人から「朝から米を食べるのか？」と半分茶化された感じで言われたことです。当然「そうだ」と答えたところ、笑われました。逆に、西欧や南米の人たちの食事を見ていると、米やパン・パスタ等の穀物を取らないで、肉のみで済ませる食事などは、私からすると驚きでした。また、イスラム教のラマダンの期間にもぶつかり、断食の仕方も理解することが出来ました。

次に、これも文化的な面で感じたことです。時の流れとともに、特にクラスメート間ではお互いの距離も縮まり、個々人の持つキャラクターが出始めてきました。その頃から感じ始めたのが、各国の生活習慣等からくる考えや習慣の差でした。そのことで衝突をして口論も度々起こるようになってきました。ここで起こった出来事の詳細は語りませんが、まさに、カルチャーショックを味わい、一時期は重く悩み苦しむという経験を積みさせてもらいました。一つ言えば、日本人の多くは、自己主張が下手なのではということを感じ、そのようなことが出来るようになる教育や訓練を受ける場が少なかったのではないかということを感じました。

最後にスポーツについてです。私は、野球もサッカーも好きですが、野球についての話題は、ほとんど出来ませんでした。やはり、サッカーは全世界のかなりの部分をカバーしているスポーツであることを実感せざるを得ませんでした。特に、国と国との威信を懸けた戦いであることを感じさせられ、ヨーロッパや南米においては、日本における盛り上がりとは違った深いものを感じずにはいられませんでした。

4. おわりに

まず、約半年間のあいだの長い期間、このような貴重な機会を与えてくださいました各方面の方々に感謝の気持ちで一杯です。ありがとうございました。また、イギリスでも貴重な出会いが多くありました。今後とも大切にしたいと考えています。特に、ほとんどが各々の問題意識や今後の希望を抱え、イギリスの大学院へ留学や進学準備をしている人たちとの出会いであったため、私としては、非常に刺激となる出会いでした。また、先生方も優しく紳士・淑女な方ばかりで、非常に恵まれ、色々と吸収させていただきました。

非常に多くのご縁を結んできたと思いますので、それを今後の仕事や生活に十分生かしていきたいと考えております。



フェアウェルパーティ（送別会）にて（右から2番目）

178日間のイギリス留学を終えて

国立女性教育会館情報交流課
（派遣時：工学系研究科等事務部学術協力課）
近 泰子
（ウォーリック大学）

1. プロローグ

たった半年間ではあったが、外国の大学で勉強し、キャンパス内の寮で生活をする機会に恵まれた。留学は長年の夢であったが、それをしてこなかったのは、やはりあと一歩の勇気が出なかったからだ。しかし今回、思い切って日本を飛び出してきて、ほんとうによかった。同時に、「なぜもっと早いうちに経験しておかなかったのだろう」と後悔が始まる。

語学をマスターするだけなら、国内でも十分に可能であろうが、実際に現地で暮らしてみること、はじめてわかること、ますますわからなくなること、そして何よりも普通に日本で生活をしていては出会えないようなユニークな外国の友だちと心の交流ができたことは、わたしの財産であり、彼らとの思い出は宝物となった。また、近くにいるときは見えなかった日本の家族や友人、周りの人たちのありがたさや、仕事や生き方などについても今までと少しちがったものの見方が出来るようになったことも、今後の人生に潤いを与えてくれた。

2. 語学研修

Londonから北西に電車で2時間ほど行くとCoventry駅に到着する。イギリス中部の工業都市Coventryは、「爆弾と建築家によって2度町は壊された」と言われている。前者は、戦時中のドイツ軍爆撃によるもので、後者は都市計画の失敗で、町が迷路のようなつくりになってしまったことに起因するものである。また、その昔、囚人の送り先だったことから、send to Coventry（仲間はずれにする）というイディオムまであるくらいで、あまり評判のおよしい町ではない。そこからバスに乗り換えて20分ほど揺られたところに、突如広がるのどかな牧草地。そこが、わたしがこれから半年間滞在すること

になるWarwick大学のキャンパスだった。

わたしは、その集中英語コースに、1学期と2学期の間席を置いた。(授業料は£2,040(約40万円)/学期・10週間)

クラスは、例年は一クラスのみだったようだが、今年初の試みでAクラス(Academic)と、Bクラス(Business)の二クラスが作られた。こちらの語学コースは、特にレベル分けテストはなく、どちらに行くかは本人の自由意思だった。実際、全体の9割は来季の大学院入学を目指している人たちばかりだったので、ほとんどはAクラスに行ったが、わたしたち東大組みは、IELTS(アイエルツ)と呼ばれる、イギリス留学のための英語学力検定テストを受ける予定がなかったため、Bクラスを選んだ。

クラスメイトは、1学期が中国人2人、韓国人1人、イタリア人1人の計6名で、2学期は韓国人が抜けて、代わりにリビア人とカザフスタン人が各1人ずつ加わって計7名となった。二クラスに分かれてくれたおかげで、一クラス6~7人という語学を学ぶ上では理想的な環境に恵まれた。また、20代の女性が多いAクラスに比べて、こちらのクラスは社会経験のある30代が大半を占めていたことも、わたしには過ごしやすい。ただ、予想はしていたが、ここはほんとうにイギリスなのか?というくらい、見事にアジア人ばかりが集まったので、この環境下で自分の英語力がどのくらい上達するのか、という疑問はあった。考えてみれば、「英語」コースなので、「英語」を話す国の人はいらざるがなかった。

さて、こちらの集中英語コースだが、全体的にアカデミックな傾向が強く、実践的な英語コミュニケーション力を習得することを期待していたわたしの想像とは少し違っていた。つまり、英会話学校ではなく、大学院予備校だと考えるとわかりやすい。したがって、授業は生徒の目的達成をサポートする形で、Listening, Speaking, Reading, Grammar, Writing等と多岐に渡って細かに行われた。わたしは、それらを月曜日から金曜日まで週24時間、毎日いたい4~6時間、朝9時から夕方4時まで受講した。下表は1学期の時間割である。

Time	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
9 .05 - 9 .55	Listening & Speaking	Listening & Speaking	Grammarst		Integrated Studies
10 .05 - 10 .55					
11 .05 - 11 .55	Integrated Studies	Reading		Grammar	Writing
12 .05 - 12 .55					
1 .00 - 2 .00			<i>Listening to the News</i>	<i>Colloquial English</i>	<i>Listening to the News</i>
2 .05 - 2 .55	Vocabulary	Business	Writing	Reading	Studies skill & examination practice
3 .05 - 3 .55					
5 .00 - 6 .00	Pronunciation				
6 .00 - 7 .00			<i>Reading & discussion class</i>		

は通常の授業で、それ以外はIn sessionalクラスである。

初めてのクラスはほんとうにみじめなものだった。わがBクラスは、最初たった4人でスタートした。そのうちの韓国人は、Ph.D.を持つ大学講師だったし、中国人はこの夏にイギリスの大学を卒業したばかりという人たちだったので、二人とのレベル差は歴然としていたのである。先生の質問にすらすらとよどみなく、かつ的確に答える二人に対して、こちらはまず質問からして聞き取れないという有様だった。このままではいけない、何か言わなくてはという強迫観念に突如駆られて、半ばやけくそになって答えてみたものの、それが正解であるはずもなく、わたしは見事に撃沈した。

その後、MBAを目指す中国人とイタリア人がAクラスから移ってきて、6人になった。一般的な内容の授業もあったが、ビジネスクラスということで扱われる題材が金融・経済・マーケティングなどビジネスに関連したものに及ぶことが多く、専門知識のある他のクラスメイトには検討がつくことでも、文学部出身で、大学職員のわたしにはお手上げだった。

日本の授業との決定的なちがいは、テキスト(プリント)がその場で配付されるため、「予習」をする必要がない代わりに、「瞬発力」が求められることである。そして、それはわたしがもっとも不得手とするものだった。たとえば、配られたプリントをざっと読んで、それについてディスカッションをするという形式の授業では、読解力(特に速読力)・語彙力が乏しいために何が書いてあるのかがつかめない、したがってディスカッションに参加したくてもできないというもどかしさがあった。

反対に、唯一「瞬発力」を求められないのはWritingである。ビジネスレターや議事録から、物語・新聞記事・論文に至るまであらゆる文章の書き方を習った。毎回出される課題エッセイは、先生がきちんと添削してくれ、コメントと共にIELTS何点相当と評価が付されて返ってきた。点数が下がると厳しいコメントが書かれるので、これがかなりのプレッシャーとなり、エッセイの宿題はいつも胃の痛くなる思いで書いていた。「おすすめの名柄株を選びその理由を説明せよ」「英国がEuroを採用した場合の賛成・反対を経済的・政治的見地から述

べよ」「チョコレート屋を世界展開するための経営戦略を書け」なんていう専門外の課題もあったが、毎週苦しんだ分、作文力だけは一番自信がたった。

また、日本の英語教育では英語を英語で説明するという訓練をしてこなかったのが、「この意味は？」と問われたときに、それを英語で説明するむずかしさに、日々もがいていた。「ああ、日本語なら説明できるんだけどなあ」は、ここでは通用しない。すべてにおいて、仮に日本語でわかっていたとしても、それを英語で説明できないことには何も始まらないし、誰にも伝わらないということを感じさせられた。

わたしは通常の授業以外に、in sessional classという全留学生を対象に、昼休みや夕方の1時間を使って行われる無料のアカデミックコースに任意参加した。曜日によっては昼食時間がカットされたりもしたが、少しでも英語に接する機会を増やしたかったことと、クラスや寮以外でも友だちができればいいなと思い、わたしは熱心に通った。

特に、Listening to the Newsは、テロ事件の状況が知りたくて通い始めたのだが、講師の人柄にすっかり魅せられてしまい、一番のお気に入りの時間となっていた。授業は、その日の朝のBBCニュースを先生が活字にして、ニュースを見た後、そのプリントに沿ってユーモアたっぷりに解説を与えてくれた。語句の説明のみならず、その事件の背景説明まで丁寧にしてくれたので、ヒアリング力や、ノートを取る力と共に、歴史や政治・文化などの知識も自然と身につけていった。

3 . キャンパスライフ

他のWarwick大生に混じって、わたしもキャンパス内の寮で生活してみた。(寮費£975(約195,000円)/学期)構内は、娯楽施設が少ない分、キッチンがひとつの社交場となっていた。キッチンは、自分を含めて8人のフラットメイトと共同で、わたし以外はみな大学院生だった。そこで食事を作っていっしょに食べたり、テレビを見たり、人を集めてパーティを開いたり、朝までお酒を飲みながらいろんなことを話し合ったりした。この情報社会の中であって、部屋にはテレビもラジオもなく、吉幾三の歌を地で行くような生活だった。そのおかげで、人と人とのふれあいが尊重された。よそのキッチンにもよく顔を出した。わたしは、教室以外のこういう時間がとても好きだった。もちろん、最初はどやどや話を切り出せばいいのかわからなかったし、運良くきっかけがつかめたとしてもそのあとの会話がスムーズにいかなかったらどうしようと、どきどきしたりして精神的に苦痛も感じていた。しかし、みんなほんとうにフレンドリーな人たちばかりで、英語の不自由なわたしにも親切に接してくれ、わたしはだんだんとキッチンに行くのが楽しくなっていった。これまで、相手が外国人というだけで変に構えていたところがあったが、このキッチンコミュニケーションを重ねることでそういう壁は自然と消えてなくなった。

4 . エピローグ

厳戒態勢の成田を出発したのは、あのテロ事件が起きてから2週間後のことだった。加えて、狂牛病に、食事にと、初めての海外生活は期待できない材料ばかりが出そろっていた。そこそこイケていると思っていた自分の英語力もまったくの勘違いであることがわかり、最初の3ヶ月はほんとうにつらかった。イギリス英語があれほど聞き取りにくいとは、思ってもみなかった。同じイギリス人でもこうもちがうものか、というほど地域・階級・世代によりたくさんの「英語」が存在する。イギリス人同士でもわからないことがあるというのだから、外国人のわたしなどは、これはもう開き直るしかない。売店でスコーンを買った際、「バターはいりますか？」が、「ブタはいりますか？」に聞こえて、返答に困った。表現、単語、発音、綴り、すべてがこれまでに習ってきたものと微妙にちがっていて、自分がかか、アメリカに染まっているのかを知ることとなった。また、わからないのはイギリス英語だけではなかった。キャンパス内は、国際色豊かで、世界中の国の人たちが英語を共通語としてコミュニケーションをとっていたので、そこには母国語なまりのいろんな英語が飛び交っていた。そんなわけで、英語の勉強はゼロからの出直しとなった。

「YASUKO」ではなく「近さん」と呼ばれる生活に戻ってあっという間に2ヶ月が過ぎてしまった。あんなに夢中で駆け抜けた日々はなかった。英語はちっとも上達しなかったが、半年間の留学体験はわたしにたいせつなものを思い起こさせてくれた。人と人が向き合うこと、そして互いを思いやること。そんなあたりまえのことをわたしはすっかり忘れていたのだった。



おかしくも真剣なクリスマス劇・1学期最後の授業にて
(下段中央)

なお、文部科学省及び日本学術振興会派遣事業等で現在海外へ派遣されている事務職員は以下のとおりである。()内は派遣前所属部局

延原 和志(教養学部等事務部教務課)

派遣先:カリフォルニア大学ディビス校(米国)
派遣期間:平成14年3月25日~平成15年3月21日
派遣プログラム:東京大学国際交流担当職員在外研修
(長期)

小暮 弥生(研究協力部国際交流課)

派遣先:モンタナ州立大学等(米国)
派遣期間:平成14年6月15日~平成15年6月1日
派遣プログラム:文部科学省国際教育交流担当職員
長期研修プログラム

長谷川 智子(研究協力部国際交流課)

派遣先:日本学術振興会ロンドン研究連絡センター
(英国)
派遣期間:平成14年4月1日~平成15年3月30日
派遣プログラム:日本学術振興会国際学術交流研修

荒井 智典(研究協力部国際交流課)

派遣先:日本学術振興会バンコク研究連絡センター
(タイ)
派遣期間:平成12年9月20日~平成14年9月30日
派遣プログラム:日本学術振興会研究連絡センター
事務官派遣

小澤 みどり(理学系研究科物理学専攻・物理学科事務室)

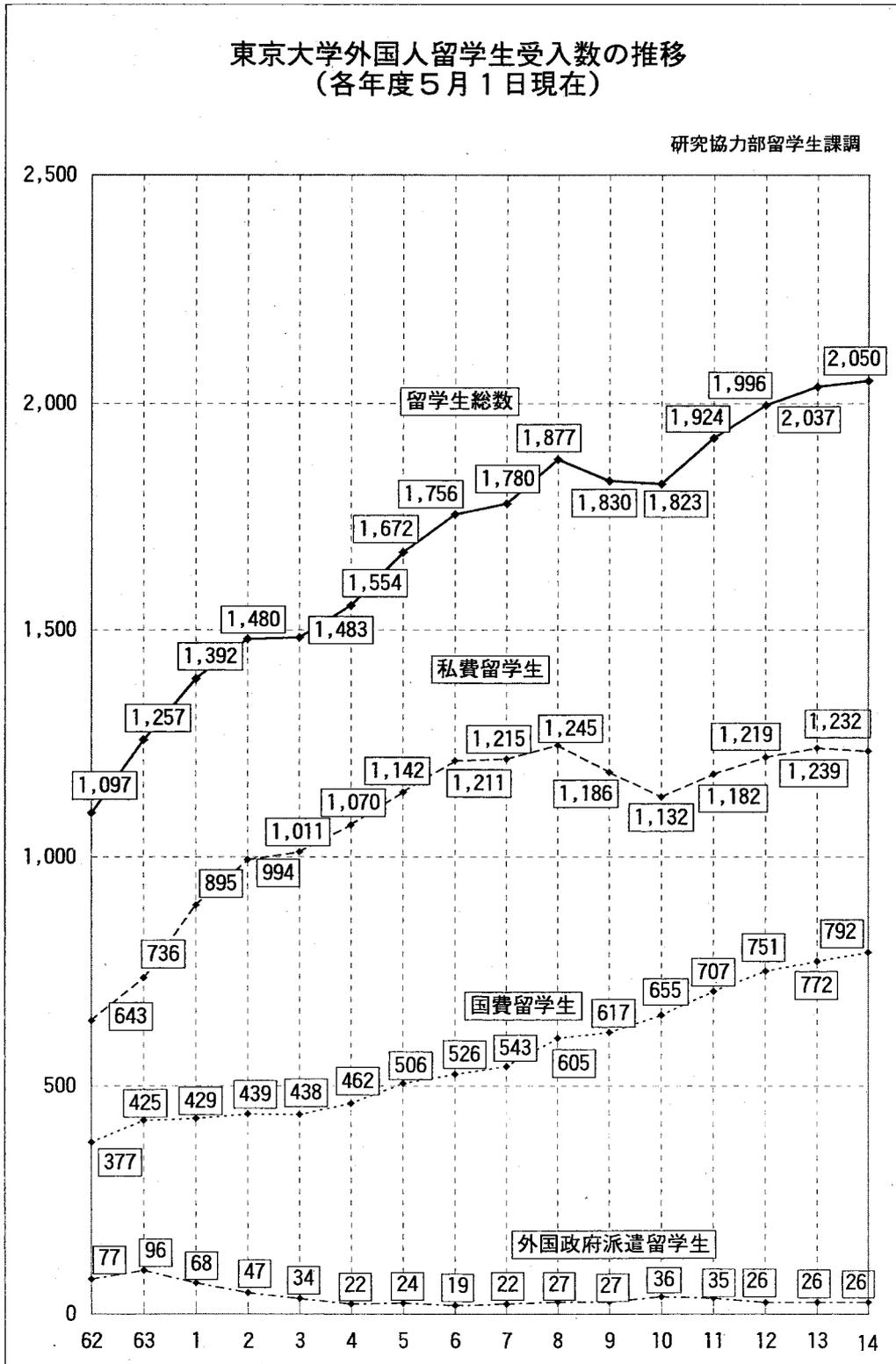
派遣先:北京語言文化大学(中国)
派遣期間:平成13年9月2日~平成14年7月31日
派遣プログラム:中国政府奨学金留学生(行政官派遣)

事務職員の海外長期研修プログラムとして以下のものがあるが、詳細については国際交流課(内線22427)に照会されたい。

東京大学国際交流担当職員在外研修(長期)
文部科学省国際教育交流担当職員長期研修プログラム
日本学術振興会国際学術交流研修
日本学術振興会研究連絡センター事務官派遣
中国政府奨学金留学生(行政官派遣)
日墨研修生・学生等交流計画派遣生

平成14年度外国人学生数 国費外国人留学生数792人、私費外国人留学生数1,232人、
外国政府派遣留学生数26人、在日外国人学生数102人

本学では、毎年5月と11月の年2回、同月1日現在の外国人学生数を調査している。これをもとに各年度5月1日現在の外国人留学生数の推移を示した。また、本年5月1日現在の外国人学生数は次頁以降のとおりである。



平成14年度 外国入学生数

平成14年05月01日現在

区分	学部				大学院								研究所等		合計	
	学生		研究生等		修士課程		博士課程		外国人研究生等		大学院研究生		研究生		男	女
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女		
国費(a)	86	35	0	0	110	48	231	101	110	64	4	3	0	0	541	251
	121		0		158		332		174		7		0		792	
外国政府派遣	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0
	0		0		2		0		0		0		0		2	
外国政府派遣	4	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6	0
	4		0		1		1		0		0		0		6	
外国政府派遣	3	3	0	0	0	0	6	0	0	0	0	0	0	0	9	3
	6		0		0		6		0		0		0		12	
外国政府派遣	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
	2		0		0		0		0		0		0		2	
外国政府派遣	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	0
	4		0		0		0		0		0		0		4	
計(b)	12	4	0	0	3	0	7	0	0	0	0	0	0	0	22	4
	16		0		3		7		0		0		0		26	
私費(c)	35	33	14	21	171	140	331	236	90	80	13	6	7	5	661	521
	68		35		311		567		170		19		12		1,182	
小計(d)((a)+(b)+(c))	133	72	14	21	284	188	569	337	200	144	17	9	7	5	1,224	776
(在留資格「留学」の者)	205		35		472		906		344		26		12		2,000	
私費(e)	3	3	0	0	5	3	7	8	10	6	1	0	4	0	30	20
(在留資格「留学」以外の者)	6		0		8		15		16		1		4		50	
外国人留学生合計(f)	136	75	14	21	289	191	576	345	210	150	18	9	11	5	1,254	796
((d)+(e))	211		35		480		921		360		27		16		2,050	
在日外国人学生(g)	52	7	0	0	15	7	14	6	1	0	0	0	0	0	82	20
	59		0		22		20		1		0		0		102	
外国人学生	188	82	14	21	304	198	590	351	211	150	18	9	11	5	1,336	816
総計(f+g)	270		35		502		941		361		27		16		2,152	

学部及び研究科等別外国人留学生数

平成14年05月01日現在

区分	学部		大学院				研究所等		小計		合計
	学生 国費	私費	修士課程		博士課程		大学院 国費	私費	研究所等 国費	私費	
			国費	私費	国費	私費					
学部											
教養学部	71	48							71	79	150
法学部	4	3							4	3	7
医学部											
工学部	31	22							31	24	55
文学部	2	2							2	2	4
理学部	6	2							6	3	9
農学部		1								1	1
経済学部	6	11							6	11	17
教育学部		1								2	2
薬学部	1								1		1
小計	121	90	35						121	125	246
大学院											
人文社会系研究科											
教育学研究科			9	45	12	65	38	46			220
法学政治学研究科			3	16	5	19	10	14	2		69
経済学研究科			5	8	3	8	13	14			51
総合文化研究科			4	6	6	8	4	2	1		31
理学系研究科			15	31	21	90	22	21	7		207
工学系研究科			7	7	19	16	8	4	2		63
農学生命科学研究科			66	96	157	190	36	34	7	2	588
医学系研究科			4	35	50	85	9	16			199
薬学系研究科			3	14	20	77	10	25			149
数理学系研究科			1	2	10	6	1	4			24
新領域創成科学研究科			5	4	5	3	1				18
学際情報学府			19	27	12	9	8	4	1		80
情報理工学系研究科			1	11	1	3	2				18
小計			16	20	11	10	12	2			71
研究所等			158	322	332	589	174	186	7	20	1,788
医科学研究所										5	5
地震研究所										1	1
社会情報研究所										1	1
生産技術研究所										8	8
分子細胞生物学研究所										1	1
物性研究所											
海洋研究所											

(注) ①外国政府派遣学生は、私費の欄に含む。

学部及び研究科等別外国人留学生数

平成14年05月01日現在

区分	学部		大学院				研究所等		小計		合計
	学生		博士課程		外国人研究生等		研究生				
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	国費	私費	
先端科学技術研究センター											
小計	121	90	35	158	322	332	589	174	186	7	20
合計										16	16
										792	1,258
											16
											2,050

全学生数に対する外国人留学生数の比率

事項	A 全学生数 人	B 日本人学生 人	C 外国人留学生 人	C/A 比率	平成13年度 比率
学部レベル	15,620	15,374	246	1.57%	1.45%
大学院レベル	13,957	12,153	1,804	12.93%	14.90%
計	29,577	27,527	2,050	6.93%	7.29%

※日本人学生欄には在日外国人(102人)を含む。
 ※研究所に所属する研究生は、大学院レベルを含む。
 ※比率欄の数は四捨五入。

(注) ①外国政府派遣学生は、私費の欄を含む。

国又は地域別外国人留学生数

平成14年05月01日現在

国名又は地域名	国			私			費			合			総計
	学部		大学院等										
	学生	研究生等	修士	博士	研究生等	修士	博士	研究生等	修士	博士	研究生等		
アジア													
インドネシア													
インド													
タイ													
フィリピン													
中国(香港)													
韓国													
モナコ													
ベトナム													
中国													
インドネシア													
インド													
台湾													
小計	92	109	228	91	520	89	18	310	34	48	37	121	1,155
中近東													
イラン													
トルコ													
パキスタン													
イスラエル													
サウジアラビア													
アラブ													
小計	5	6	17	8	36	1	1	7	3	12	6	11	48
アフリカ													
エジプト													
チュニジア													
アルジェリア													
マリ													
ケニア													
コンゴ民主共和国													
ナイジェリア													
カメルーン													
セネガル													
ニジェール													
エチオピア													
マリ													
小計	2	1	14	5	22								30

国又は地域別外国人留学生数

平成14年05月01日現在

国名又は地域名	国				私				合計				総計	
	学部		大学院等		学部		大学院等		学部		大学院等			
	学生	研究生等	修士	博士	学生	研究生等	修士	博士	学生	研究生等	修士	博士		
オセアニア														
オーストラリア	4		3	3	3		1		1		1	3	3	14
ニュージーランド	1		1	2	1		3		3		1	3	1	9
ハブマ・ニュージー				1	1		1		1		1	1	1	2
小計	5		4	6	4		4		4		5	7	4	25
北米														
カナダ	1		2	3	5		1		1		3	6	7	17
アメリカ合衆国	1		1	7	6		5		3		3	4	10	16
小計	1		3	10	11		5		4		6	7	16	35
中南米														
メキシコ	1		2	2	1						2	2	4	8
エルサルバドル				2								2		2
コスタリカ				1			1					1		2
ブラジル			7	6	2		15		3		2	9	4	20
パラグアイ	1			1	2		2				1	1	2	5
アルゼンチン				3	2		5					3	2	5
ペルー			1	1	3		5				1	1	3	5
ボリビア			1	1	2		4				2	1	3	6
コロンビア			1	1	2		3		2		2	1	2	5
ジャマイカ				1	2		3		2		1	2	2	5
ドミニカ				1	1		1		1		1	2	1	2
小計	2		11	19	13		45		3		8	2	14	58
ヨーロッパ														
フィンランド				2			2				1	1	4	1
スウェーデン			1		1		2		1		2	1	4	7
ノルウェー					1		1					1	1	2
デンマーク			1	1	1		3		3		1	1	1	1
イギリス			1	1	5		7		1		3	2	4	14
ベルギー				1	3		4					1	3	4
ルクセンブルク				1	1		2					1	1	1
オランダ			1	2	1		4					1	2	4
ドイツ			1	8	2		11		1		1	2	1	4
フランス			11	2	8		21		3		3	11	10	17
スペイン				3	4		7					3	3	25
ポルトガル	1			2	3		5		1		1	3	4	7
イタリア			1	2	3		6				1	4	4	9
ギリシャ				1	1		2				1	1	1	2
オーストリア				1	1		2				1	1	1	2
スイス				1	1		2					1	3	3
ポーランド				2	1		3		1			2	1	3
チェコ				2	2		4					2	2	2
ハンガリー	3			2	4		9				3	2	4	9
ユーロ・アジア				2			2		1		1	2	1	1

国又は地域別外国人留学生数

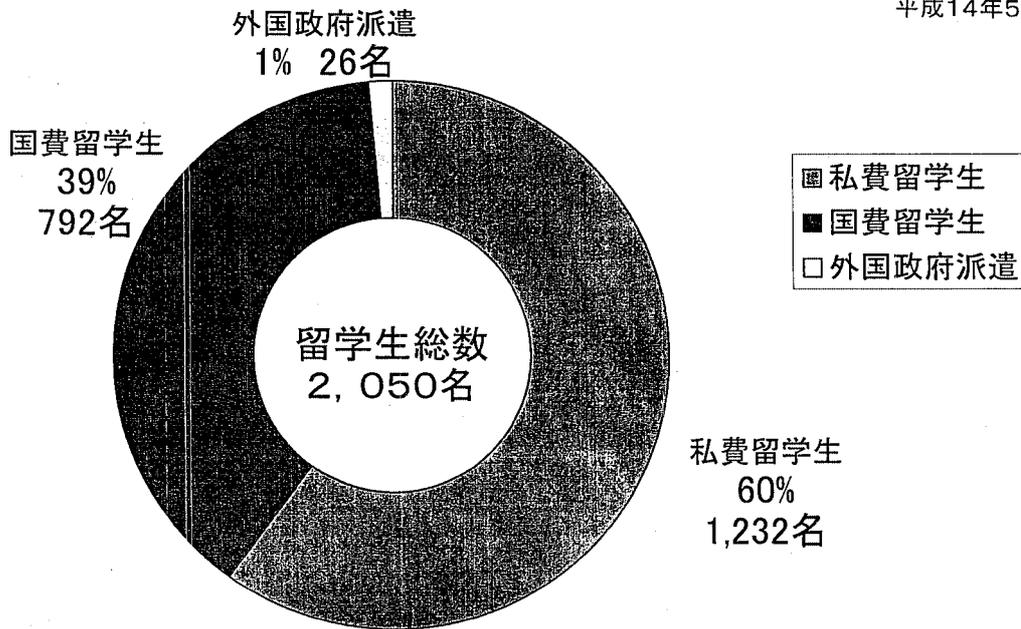
平成14年05月01日現在

国名又は地域名	国				私				合				総計	
	学部		大学院等		学部		大学院等		学部		大学院等			
	学生	研究生等	修士	博士	研究生等	修士	博士	研究生等	学生	研究生等	修士	博士		研究生等
ルーマニア	3		2	1				1		3		2	1	7
フランス	4		1	2			1		4		1	1	2	8
アルバニア				1									1	2
ロシア	2		3	2			2		2		3	4	8	17
スロバキア				1									1	1
ウクライナ				3									3	4
ウズベキスタン			1								1			1
ロシア			1								1			1
アルバニア				1									1	1
ロシア				1									1	1
トルコ	1													2
小計	14		24	38	49		15		8	3	322	589	8	162
合計	121		158	332	181		589		35	322	222	921	403	2,050

(85か国・地域)

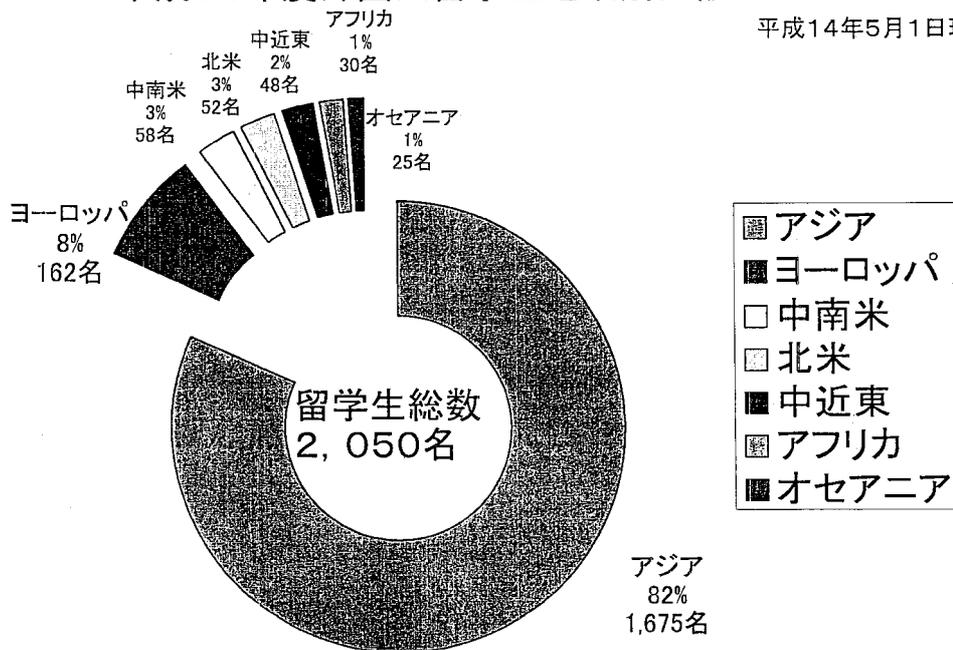
平成14年度外国人留学生種別内訳

平成14年5月1日現在



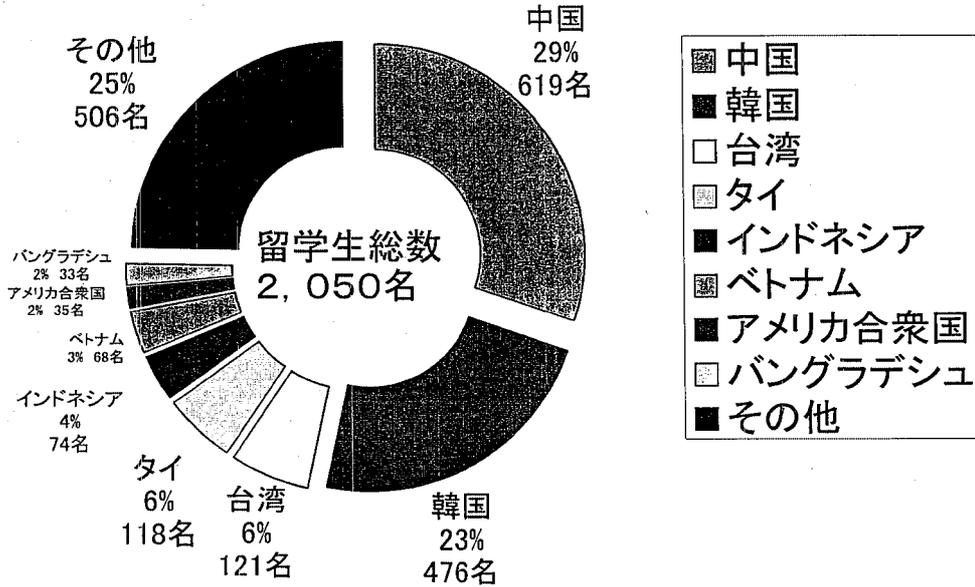
平成14年度外国人留学生地域別内訳

平成14年5月1日現在



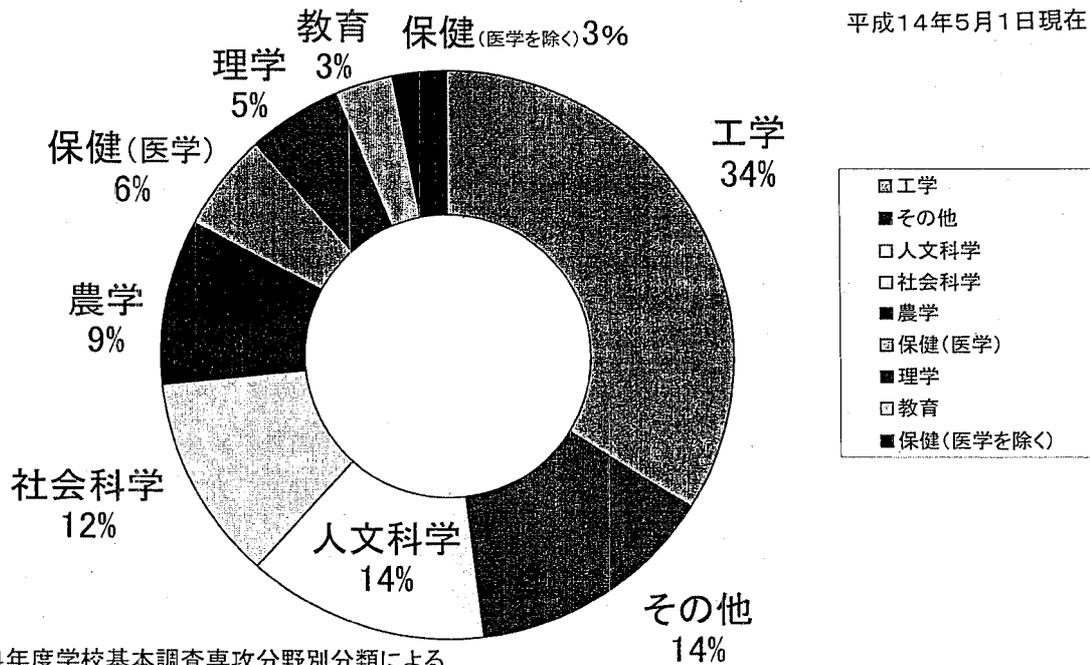
平成14年度外国人留学生国籍別内訳

平成14年5月1日現在



平成14年度外国人留学生専攻分野内訳

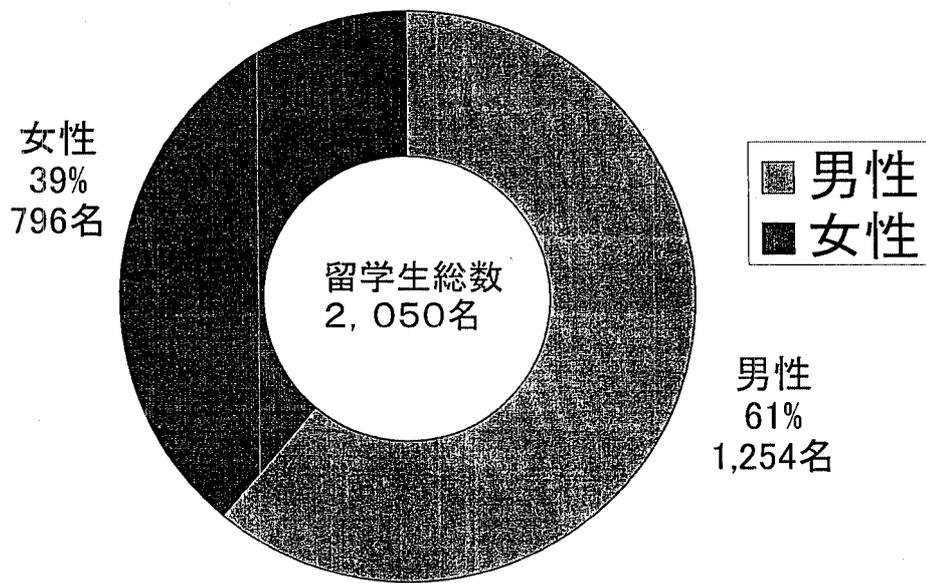
平成14年5月1日現在



※平成14年度学校基本調査専攻分野別分類による

平成14年度外国人留学生男女別内訳

平成14年5月1日現在



東京大学外国人留学生後援会平成13年度事業報告・収支決算及び平成14年度事業計画・収支予算について

東京大学外国人留学生後援会の平成13年度事業報告・収支決算及び平成14年度事業計画・収支予算（5月28日第8回役員会承認）は、次のとおりです。

別	紙	1
別	紙	2
別	紙	3
別	紙	4

本年度も、20名の奨学生（4月採用分、10月には新たに10名を採用予定）に対して奨学金を支給するほか一時金の貸与なども実施するとともに、平成11年度より例年実施している好評の留学生スキ-ツア-等の各種企画など、本格的な活動を行うこととしています。

なお、賛助会員として本学卒業生、特別会員として東京大学消費生活共同組合等の皆様にも御入会いただいております。今後も奨学生数の増員など本後援会の事業に対しては多大な期待が寄せられておりますので、まだ御入会いただいていない教職員の方々におかれては御参加を検討下さるようお願い申し上げます。

問い合わせ先 東京大学外国人留学生後援会事務局（留学生課留学生第二掛内）
（Tel03 - 5841 - 2372）

（東京大学外国人留学生後援会）

（別紙1）

平成13年度事業報告

1. 奨学生の募集・採用

- 平成13年度第1回奨学生（5期生）10名（5万円×12カ月×10名）、第2回奨学生（6期生）20名（5万円×6カ月×20名）を採用し、奨学金を支給した。
- 霞ヶ関ライオンズクラブからの寄付を基金とし、同クラブの名称を付した「霞ヶ関ライオンズクラブ奨学生」2名（60万円×2名）を採用し、奨学金を支給した。
- 吉田育英会からの寄付を基金とし、同育英会の名称を付した「吉田育英会奨学生」4名（25万円×4名）を採用し、奨学金を支給した。

2. 一時金の貸与（1万円以上20万円以内、特別な事情がある場合は20万円以上も可。原則として貸与を受けた翌月から1年以内に返済）

- 入学料免除申請の結果、免除不許可となったために一時金貸与申請があった留学生2名に対し、35万円を貸与した（平成13年度8万円返済済み、残額27万円は

平成14年度返済予定）。

- 授業料免除申請の結果、免除不許可となったために一時金貸与申請があった留学生3名に対し、60万円を貸与した（平成13年度30万円返済済み、残額30万円は平成14年度返済予定）。
- 入院のために一時金貸与申請があった留学生3名に対し、37万円を貸与した（平成13年度37万円全額返済済み）。
- 平成12年度に一時金を貸与した留学生3名から、平成13年度に返済があった。（平成13年度40万円返済済み、残額14万円は平成14年度返済予定）。

3. 主なボランティア活動への支援等

- 東雪会（本学スキ-部OB会）の協力を得てスキ-ツア-を主催するとともに、ツア-運営を行った同会へ支援を行った（期間：平成14.2.15～18、場所：本学スキ-部合宿所・白嶺荘（長野県北安曇郡）参加留学生：11学部・研究科27名/応募数80名）
また、地元の小谷中学校生徒との交歓会を行った。
- 弁護士のボランティアグループによる無料法律相談活動への支援（後援会は、法的問題を抱えた留学生と東京大学留学生を支援する弁護士の会（ALIS）との間の連絡・調整）を昨年度に引き続き取り付け、相談に応じられるようにした。

4. その他

- 新規会員の勧誘活動を行うとともに、東京大学同窓会連合会、東京大学三鷹寮同窓会に対し、勧誘活動への協力要請を行った。
- 留学生が民間アパート等の賃貸契約を行う際に、留学生の希望により、連帯保証人（保証範囲は、①滞納家賃、②現状回復費用、③遺留物処分費用の3点に限定）を平成11年度より留学生課長が務めており、同課長が債務保証を行っている（平成14.3現在、同課長が連帯保証人になった契約件数・累計272件）。これらの契約を締結する際には、留学生（借主）に対しては、勸内外学生センター「留学生住宅総合補償」制度に加入することを義務づけているが、同制度の連帯保証人に対する保険金額は30万円までであるため、それを超えた場合、その差額を本会が留学生課長に支援する体制を、昨年度に引き続き設けた。

(別紙2)

東京大学外国人留学生後援会
平成13年度収支決算書

収入の部

(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差引増減	備 考
会 費	18,794,520	15,861,460	2,933,060	本学会員会費:14,073,960円、 賛助・特別会員会費:1,787,500円
寄 付 金	2,500,000	700,000	1,800,000	東京大学消費生活協同組合、大園名誉教授
預 金 利 息	10,000	7,800	2,200	
一 時 金 返 済	2,560,000	1,150,000	1,410,000	入学料、授業料免除不許可のため、その納入の ために貸与した一時金の返済
奨 学 金 返 戻 金	0	300,000	300,000	他の奨学金取得のため、奨学生辞退(2名×5 万円×3か月)
当期収入合計(A)	23,864,520	18,019,260	5,845,260	
前期繰越収入	35,731,622	35,731,622	0	
合 計(B)	59,596,142	53,750,882	5,845,260	

支出の部(単位:円)

科 目	予 算 額	決 算 額	差引増減	備 考
奨 学 金	14,200,000	14,500,000	300,000	10名×5万円×12か月(5期生) 20名×5万円×6か月(6期生) 2名×60万円(霞ヶ関ライオンズクラブ) 4名×25万円(吉田育英会) 2名×15万円分は、支給後、辞退(収入の部奨 学金払戻金欄で払戻額計上)
見 舞 金	1,000,000	0	1,000,000	1か月以上の入院のため多額の費用がかかった 留学生等への給付
一 時 金	3,000,000	1,320,000	1,680,000	入学料、授業料等納入のため貸与
ボランティア活動支援金	800,000	300,000	500,000	スキ-ツア-支援等
印 刷 費	200,000	199,920	80	パンフレット作成費
事 務 経 費	150,000	83,400	66,600	賛助会員等への通信費等
銀行等振込手数料	40,000	26,410	13,590	各種経費、賛助会員会費納入等振込手数料
予 備 費	100,000	0	100,000	
当期支出合計(C)	19,490,000	16,429,730	3,060,270	
当期支出差額(A)-(C)	4,374,520	1,589,530	2,784,990	
次 期 繰 越(D)	40,106,142	37,321,152	2,784,990	
合 計(C)+(D)	59,596,142	53,750,882	5,845,260	

(別紙3)

平成14年度事業計画

1. 奨学生の募集・採用

平成14年度第1回奨学生(7期生)20名、第2回奨学生(8期生)10名の奨学生を募集・選考し、奨学金を支給する(1,200万円:60万円×20名、300万円:30万円×10名、計1,500万円)。

2. 見舞金の支給

- ・外国人留学生で、事故・災害等による被害を受けた者、または病気・けが等により1カ月以上入院した者
- ・本学からの派遣学生で、留学先で不測の事態に遭った者
- ・本学教職員で、留学生の保証人になり、不測の事態に遭ったことにより特別な経済的負担を負った者
- ・その他、特に支給が必要と認められた者に対し、見舞金を支給する。

3. 一時金の貸与

- ・外国人留学生で、事故・災害等に遭い、生活の維持が困難になるほどの被害を受けた者、病気・けが等により多額の費用を負担した者、または入学金・授業料の納入が困難な者
- ・本学からの派遣学生で、留学先で不測の事態に遭った者
- ・その他、特に貸与が必要と認められた者に対し、一時金を貸与する。

4. ボランティア活動への支援

(1) スキ・ツアー・協力団体等への支援

- ・スキ・ツアー(予定)

開催予定場所.....本学スキ・部合宿所・白嶺荘(長野県北安曇郡)

開催日程.....2泊3日、冬休み等の時期

留学生参加人数...約30名

交通手段.....貸切りバス

協力団体.....東雪会(本学スキ・部OB会)

(2) 弁護士のボランティアグループによる無料法律相談活動への支援 後援会は、法的問題を抱えた留学生とボランティアグループ(東京大学留学生を支援する弁護士の会(ALIS))との間の連絡・調整を行う。

無料相談は、同弁護士の会の会員が担当する。

相談までの連絡の流れは次のとおり。

留学生 所属部局の国際交流室等 留学生グループの代表者 弁護士

(3) その他、スポーツ大会等学生交流活動への支援を検討、実施する。

5. その他

(1) 新規会員の勧誘活動を行うとともに、東京大学同窓会連合会、東京大学三鷹寮同窓会に対し、勧誘活動へ

の協力要請を行う。

- (2) 留学生が民間アパート等の賃貸契約を行う際に、留学生の希望により、連帯保証人(保証範囲は、①滞納家賃、②現状回復費用、③遺留物処分費用の3点に限定)を平成11年度より留学生課長が務めており、同課長が債務保証を行っている(平成14.3現在、同課長が連帯保証人になった契約件数・累計272件)。これらの契約を締結する際には、留学生(借主)に対しては、財内外学生センター「留学生住宅総合補償」制度に加入することを義務づけているが、同制度の連帯保証人に対する保険金額は30万円までであるため、それを超えた場合、その差額を本会が留学生課長に支援する体制を、昨年度に引き続き設け、留学生が民間アパート等の賃貸契約を行う際の障害を取り除く。

(別紙4)

東京大学外国人留学生後援会
平成14年度収支予算書

収入の部

(単位：千円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	差引増減	備 考
会 費	15,861	18,795	2,934	会員(教職員)1,054名、賛助(卒業生)・特別会員288名(H14.5現在)
寄 付 金	1,900	2,500	600	東京大学消費生活共同組合
預 金 利 息	10	10	0	
一 時 金 返 済	1,710	2,560	850	入学料、授業料納入のため貸与した一時金の返済
当期収入合計(A)	19,481	23,865	4,384	民間等奨学金採用のため、本会奨学金辞退に伴う奨学金の返戻
前年度よりの繰越	37,321	35,731	1,590	
収 入 合 計(B)	56,802	59,596	2,794	

支出の部

(単位：千円)

科 目	予 算 額	前年度予算額	差引増減	備 考
奨 学 金	15,000	14,200	800	20名×5万円×12か月=12,000,000円(7期生) 10名×5万円×6か月=3,000,000円(8期生)
見 舞 金	1,000	1,000	0	1か月以上の入院のため多額の費用がかかった留学生等への給付
一 時 金	3,000	3,000	0	入学料、授業料納入等のための貸与
ボランティア活動支援金	800	800	0	スキーツア支援等
印 刷 費	200	200	0	パンフレット作成費
事 務 経 費	150	150	0	賛助会員等への通信費等
銀行等振込手数料	40	40	0	各種経費、賛助会員会費納入等振込手数料
予 備 費	10,000	100	9,900	留学生に不測の事態が生じた場合の対処費用等
当期支出合計(C)	30,190	19,490	10,700	
当期収支差額(A)-(C)	-10,709	4,375	15,084	
次年度への繰越(E)	26,612	40,106	13,494	
合 計(C)+(E)	56,802	59,596	2,794	

≪ キャンパスニュース ≫

五月祭開催される

第75回五月祭は、5月24日（金）午後の学内公開、25日（土）、26日（日）の一般公開と3日間にわたり本郷キャンパスで開催された。講演会、研究発表、シンポジウムの他、趣向を凝らした各種パフォーマンスの披露や模擬店等318件の企画が催された。

幸い25日（土）、26日（日）の一般公開日は好天に恵まれ、両日合わせて約56,000名の来場者が訪れた。開催期間中は日頃とは違う光景がキャンパスの各所で繰り広げられ、終日賑わいをみせながら無事終了することができた。

（学生部）



五月祭の風景

≪ 部局ニュース ≫

医学部附属病院がワールドカップ開催に合わせてテロ対策シミュレーションを実施

医学部附属病院（加藤進昌病院長）は、5月31日午後1時からテロ対策シミュレーションを救急車専用駐車場で実施した。

時はおりしも、FIFAワールドカップKORIA/JAPAN開会式当日にあたることから、「緊急事態の中にあつては、医療、看護、事務が協調し、かつ迅速な対応が求められる。今日のシミュレーションは、作業を行なう医療チーム6名が、すべて防護服を利用して臨むことに重要な意義があり、これを基礎として、看護、事務とともにテロ等の緊急事態にも万全の体制を整えたい。」と矢作救急部長の檄が飛ぶなど、緊張した雰囲気の中で実施された。

シミュレーションは、都内某所でサリンによるテロ災害発生、感染患者が東大病院に運ばれるという想定のもと、医師、看護師、事務官、防災センター職員等約50名が参加し、除染システムの立ち上げ、防護服の着衣訓練、模擬患者への除染作業、除染後の搬送訓練を行なった。

また、実際の除染システム訓練を行なうことから、東京消防庁本郷消防署の消防指揮隊も参加するなど関心の



模擬患者への除染作業



訓練の様子

高さを感じさせた。

訓練は、約2時間にわたって実施され、「今後も定期的に訓練を行い、病院職員として一体となり、昼夜変わらず、患者さん受け入れに万全を尽くしたい。」との齋藤事務部長の挨拶で締めくくった。

(医学部附属病院)

未来の科学者サテライトスクール2002春 サイエンスアカデミア物性研究所コース、宇宙線研究所コース開催される

柏キャンパスと地元千葉県との地域連携を象徴する上記の科学教室として、物性研究所コースが3月25、26日及び宇宙線研究所コースが28、29日にそれぞれの研究所で開催された。

未来の科学者サテライトスクールは、青少年の科学への興味・関心や創造的能力を養うための環境作りの一環として千葉県によって実施されているものである。

サイエンスアカデミア物性研究所コースでは、高校生24名を受講生とし、同研究所八木健彦教授による「物性科学に関する講義、実験等」が、また宇宙線研究所コースでは、高校生12名を受講生として、同研究所黒田和明教授による「物理学、特に重力の物理に関する講義、実験」が実施された。

以下に、各コースにおける講師からの報告と受講生からの感想文(抜粋)を掲載します。

サイエンスアカデミア物性研究所コース報告

物性研究所コースでは、「熱い氷、透明になる黒鉛：超高压の世界を覗いてみよう」というタイトルで、2日間にわたり講義と実験が行われた。圧力は温度と共に物質の状態を大きく変化させる重要なパラメータであるが、液体や固体の物質が圧力により変化する様子を見る機会は、ふだんの生活ではほとんど無い。初日はまず、圧力により物質がどのように変化するのか、また実験室内で超高压を発生させるためにどのような実験装置が開発されてきたのかを講義で説明した後、実験室の見学を行った。最近ではダイヤモンドアンビル装置と呼ばれる小型の装置で比較的手軽に10万気圧程度の超高压力を発生させ、試料の様子を顕微鏡で直接観察することが可能になっている。その装置がどんなものかを見てもらった後、翌日までの宿題として、この装置を使って数万気圧まで加圧したら面白いと思われる身近な物質を、その理由を考えて選んできてもらうことにした。2日目は、参加者のほとんどが洗剤や塩水、油など身近なものを持ってきて、それぞれに自分で考えたり調べたりした高压下の振る舞いを予測し、その中から実際に3種類の試料を選んで、3班に分かれて高压実験を行った。限られた時間で目視観察だけを行ったため、明瞭な変化が見られた物質は限

られていたが、参加者それぞれが熱心に実験の様子を見つめ、さまざまな質問をして、活気のある実験だった。その後ビデオテープに録画されていた黒鉛の六方晶ダイヤモンドへの転移やレーザー加熱による鉍物の相転移の様子などを見て、コースを終えた。

2日間にわたる講義と実験にかけた労力は少なからぬものではあったが、科学を目指す高校生たちの熱心なまなざしに、若者の科学離れが喧伝される今日、このような企画の重要性を感じさせられた。最後に、コース開催に当たって実験の手伝いやさまざまな用務を行ってくれた研究室のメンバーや事務の方々にお礼を申し上げたい。

(物性研究所教授 八木健彦)

(受講生からの感想文抜粋)

- ・貴重な体験ができたと思い、参加してよかったと思いました。今回そう感じた一番大きな理由は最先端の研究をする際にどう取り組めばいいのか、研究をするとはどういうことなのかが大いに学びとれたからです。八木先生の講義では、研究者としての視点で実際の研究の経験や、研究に大切な事をわかりやすく語ってくださったので、科学現象そのものの楽しさだけでなく研究を行う楽しさや厳しさが伝わってきて、将来は未知の領域を研究したい、という思いが明確になってきました。この2日間の体験や八木先生の言葉を思い出して、scienceにチャレンジしていく姿勢や科学への夢を持ち続けていきたいと思います。
- ・私は超高压の実験と聞いて大がかりな実験装置を想像していたのですが、実際にはダイヤモンド・アンビルという小さな器具を用いたので意外に思いました。高压物理の世界だけでなく、他の研究施設を見せていただいたのは幸いでした。今回の機会が私にとっての転換点となるのは疑いありません。今後もさまざまなことさらに興味をもち、可能性を広げる努力をしたいと思います。
- ・学校などでは見られない実験が見れたり、身近な物質が圧力によって違った状態になるということを講義と実験を通して学ぶことができ大変貴重な体験だったと思います。また大学の研究でどんなことをやっている



大型プレス室で説明を受けている高校生

のかなど普段疑問に思っていることがわかってよかったです。

- ・初日の実験であった水を1万～2万気圧の高圧にかける実験で感じたことは、知識だけを頭の中に蓄えておくのではなく、実験に対する自分自身の技術をも練成していく必要があるのだなと思ったことです。実験ではハチミツに高圧をかけました。約5万GPa以上の圧力をかけたら見た目の変化があらわれるのだろうか。あらわれないとなると特殊な物質ということになるのだろうか。1つのことでも、色々な角度から見てみると多種多様なことが見えてくる。今回のスクールでは見方を変えてみるということを学びました。

サイエンスアカデミア宇宙線研究所コース報告

今回のコースでは、万有引力の定数をはかる体験を通して、自然の法則をより身近に感じてもらうことである。重力は、惑星の運動はもとより宇宙の進化を支配する力の一つであり、その定数の精密測定は最近活発に取り組まれているテーマでもある。講義ではそのような難しい話は一切せずに測定原理の説明に止め、ねじれ秤を作ること、ねじれ秤を収納する木箱の内側に静電気を遮蔽するためのアルミ箔を貼ること、ねじれ振動の角度を電気信号に変えるための光センサーを作ること、これらを12名の参加者を3組に分け、それぞれのチームごとに分担を決めて取り組ませるようにした。作業では、自分にできないと思ったことは無理にしないことなど一般的な注意を与えた。初めは知らない者同志で互いの分担を決めることなどとまどいも多々あったと思われるが、初日で各部分を完成させることができた。2日目、各部分を組み付けて完成である。ねじれ秤を木箱に入れる際に吊り糸が切れたりするなどのハプニングがいくつかあったが、終了間際の30分までにはすべてのチームで重力の測定にかかることができ、数十kgのおもりが発生する重力の効果を、電気信号として捉えることができた。実験を指導する側としては初めての開講であり、測定まで至らない段階で時間切れとなることも覚悟していたが、参加者がトラブルもなく喜々として実験に取り組み、2日にわたる6時間の中で重力の効果までみることはできたのは幸運であった、と思う。参加者が、日常的にありふれたベニヤ板とかアルミ箔とか言ったものだけでできた装置で、万有引力の定数が測定されることに驚いてくれれば、このコースは成功である。学会シーズンで研究室の人々が出払った中で実験指導を手伝ってくれた、大学院生の皆さんや技官の方にお礼を述べたい。

(宇宙線研究所教授 黒田和明)

(受講生からの感想文抜粋)

- ・実験道具まで作っておもしろかったです。現象については本で読んで知っていたけれど、実際に自分で計ると大変で、やっぱり百聞は一見にしかずだと実感しま

した。

- ・装置を作ると聞いてはじめはびっくりしたけれど、やってみると意外におもしろくて熱中してしまいました。重力という一見気にならない程小さい力を計ることの大変さは考えていたよりも難しいものでした。それを知ることができただけでもとても大きな収穫でした。2日間ですがとても貴重な体験ができこれからの自分の姿勢にも大きな自信になると思います。
- ・ハンダの実物を初めて見た。工作作業は数年振りだったし、初めて見る工具も多かったので、上手く出来なかったけれど、面白かった。奇妙な変化が起こってばかりだったので、綺麗なsinカーブが出て来た時はうれしかった。最終的な結果は重力が100倍という恐ろしい結果だったが、計測出来て良かった。
- ・アルミを細く切る。なかなかうまくいかないのが大変だったけどおもしろかった。
- ・重力定数という宇宙空間をも規定する大切な数値を、高校生が測るので、大した企画だと思っていました。ところが、実際には木とアルミホイルという身近な材料で装置が組み立てられていたことに驚きました。理論がしっかりしていれば、工夫次第で科学実験ができるのを実感しました。ただ1つ残念だったのは、測定値による定数の値が2ケタも異なったことです。今回のサテライトスクールは、実験の難しさをも教えてくれたようです。
- ・装置をつくるのは、随分時間がかかってしまう。簡単なものなのに。実験っていうのは、むずかしい。ふしぎな形ができるのも、実験ならではの、とてもおもしろかったです。
- ・たかがアルミ箔のぶんざいでよく手こずらせてくれました。2mmがあんなに大きいとは。
- ・自らの手で重力を計れるとは思ってもいなかった。それが出来たのは非常に楽しかったです。



重力波実験室で実験中の高校生

(柏地区事務部企画課)

≡ 掲示板 ≡

AGS研究助成企画案の募集

東京大学、マサチューセッツ工科大学（MIT）、スイス連邦工科大学、チャルマース（Chalmers）工科大学（スウェーデン）の4大学で進めているAGS（Alliance for Global Sustainability：人間地球圏の存続を求める大学間国際学術協力）では、新たな研究助成企画を募集しております。ご希望の方は、来る8月12日までに提案の意思を示し、10月18日までに提案書をご提出お願いいたします。また、新企画の研究提案方式である、11月18 - 19日にMITで開催予定のAGS技術会議のワークショップに研究企画を提案ご希望の方は、事前に下記事務局とご相談のうえ、8月12日までに提案概要を提出願います。これら大学間の共同研究を奮って提案いただくよう、ご案内申し上げます。

詳細については、<http://www.esc.u-tokyo.ac.jp/ags/agsnews.html>をご参照下さい。

問合せ先：AGS事務局 浅尾修一郎（内線27937）

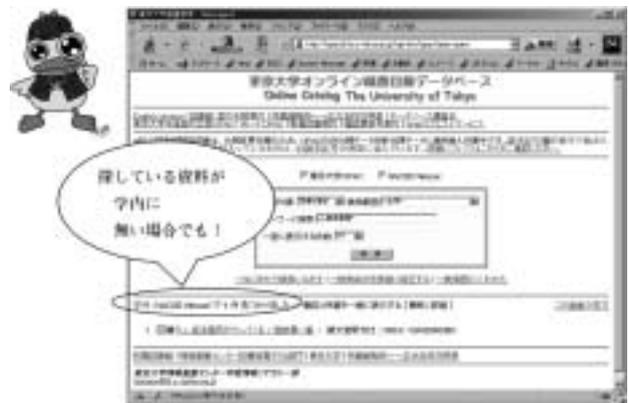
必要な資料の所在が一度に調べられます

- O P A C と N A C S I S - Webcatの横断検索開始のお知らせ -

2002年6月より、情報基盤センター図書館電子化部門と附属図書館では東京大学O P A Cの機能を拡張しました。（O P A C：オンライン・パブリック・アクセス・カタログ：東京大学図書館オンライン目録データベース）

この拡張機能により東京大学O P A Cは、東京大学附属図書館の所蔵資料はもとより、学内で所蔵していない場合には、自動的に国立情報学研究所が提供する全国の大学図書館等の総合目録データベース（NACSIS Webcat）を検索し、必要な図書・雑誌を容易に探し出すことができるようになりました。これは、この6月から公開された国立情報学研究所の検索専用サーバーを利用した、全国でも数少ない先駆的なサービスです。是非、研究・学習にご活用ください。

東京大学O P A CサービスURL
<http://opac.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/>



問い合わせ先：東京大学情報基盤センター学術情報リテラシー掛
(literacy@lib.u-tokyo.ac.jp)
(情報基盤センター・附属図書館)

≡ 広報委員会 ≡

『学内広報』掲載写真の公募

次の要領で、「学内広報」に掲載する写真とその内容の紹介文を、広く本学関係者から募集します。

- | | |
|--|--|
| <p>1. 内 容：東京大学に関するものなら内容は特に問いません。学内点描でも、一般の学内の人達になじみのうすい乗鞍や北海道などの各種施設の状態でも、観測船やスーパーカミオカンデなどの各種設備の概観でも、電子顕微鏡や高速度瞬間写真などによる珍しい現象でも、なんでも結構です。</p> <p>2. 形 式：特に問いません。</p> | <p>3. 説明文：500字程度の写真内容を説明する文章をつけ、所属・氏名を明記してください。</p> <p>4. 縮 切：特に設けません。随時。</p> <p>5. 掲 載：原則として、表紙に掲載します。</p> <p>6. 送り先：〒113-8654 文京区本郷7-3-1
 東京大学 事務局総務課広報室
 03(5841)2031</p> |
|--|--|

投書欄「噴水」にご意見を!!

「学内広報」には、皆様から投書を寄せていただく欄として、「噴水」が設けられています。この欄への投書要領は、次のとおりです。

- 1 本学における教育・研究活動に関する建設的な意見を述べたものであること。
- 2 個人の投稿で所属・氏名を明記したものであること。
- 3 他者への非難・攻撃を含まないものであること。

以上の要件をそなえるものの中から、広報委員会が適当とするものを、適宜、掲載します。

送り先 〒113-8654 文京区本郷7-3-1
 東京大学 事務局総務課広報室 03(5841)2031

≡ 訃 報 ≡

神山 雅英 名誉教授

本学名誉教授、神山雅英先生は病氣ご療養中のところ平成14年5月9日に逝去されました。

神山先生は明治44年東京のお生まれで、鹿児島県立第一中学校、第七高等学校を経て昭和9年京都大学理学部物理学科を卒業されました。京都大学助手を経て昭和17年東京帝国大学第一工学部講師に着任され、理化学研究所副研究員等も務められて終戦直後の昭和20年9月東京帝国大学助教授に任ぜられました。戦後揺籃期の工学部応用物理学科において研究教育に携われ、昭和35年工学部に電子工学科が新設されると同学科教授に移られて、昭和46年の定年ご退官まで同学科の発展に尽くされました。御退官後は東京理科大学において引き続き研究と後進の指導にあたられました。

先生の御研究は電子工学および応用物理学の各方面にわたっており、かつその学問的基礎を築くものでした。特に近赤外部から極端紫外部に至る各種気体放電の分光学的研究は気体レーザーの研究開発の基礎となり、さらに固体レーザーから半導体レーザーに至るまで、わが国のレーザー研究の勃興を指導され多大の学問的貢献をなさいました。またこれらレーザーの工学的応用としてホログラフィー、高速写真、光結合素子、光偏向の研究にも顕著な貢献をされ、わが国に量子エレクトロニクス、光エレクトロニクスを確立する先導をなさいました。先



生の御研究のもう一つの流れは絶縁体、半導体等の薄膜の製法ならびに物性に関する基礎的研究であり、これらは現在の半導体集積エレクトロニクスの礎を成しています。

これらのご業績の上に立って先生は関連学界の興隆にも努められ、昭和36年には日本学術振興会に第131委員会（薄膜委員会）を創設されて長く委員長を勤められました。また昭和44年には第6回量子エレクトロニクス国際会議の実行委員長として同会議を日本に招致されました。その他多くの学会や政府関係委員を務められましたが、特に応用物理学会についてはその創立期から理事を務められ、昭和41年から43年まで会長を務められて現在の同学会隆盛の礎を築かれました。昭和45年には日本学術会議第5部の会員に選出されておられます。こうした研究ならびに教育の分野での大きなご功績により昭和58年には勲三等旭日中綬章を受けられました。

先生は常に物静かで穏やかな態度で若い人にも包容力をもって接しておられましたが、一方学問の緻密さ、正確さを尊ぶことを厳格に伝えられ、門下からは世界の光エレクトロニクスの屋台骨を担う人々が輩出しています。現代の情報化社会のハードウェア面での生みの親の御一人と言って過言ではありません。91歳のご生涯はまことに天寿を全うされたと言うべく、謹んでご冥福をお祈りする次第です。

（大学院工学系研究科・工学部）

「昨今の東大らしさ 雑感」

以前何かで読んだことがあるが、最近の東大生に対するガールフレンドからの最高の賛辞は、「あなたは“東大生”らしくないわね。」だそうである。おそらく、この賛辞は、その人物が「伶俐過ぎない」、「やさしい」などということを表しているであろう。要するに、彼が「物わかりがよく、気が利いた」人物であるということ意味している。

それでは、逆に、ここでステレオタイプ化されている“東大生”らしい東大生が現在もいるのかということ、はなはだ不安である。絶滅危惧種に指定されてもいいのではないかと思うほど急激に希少になっている気がする。最近、学生同士が議論しているところを見かけることが少なくなった。互いに衝突を回避し、物わかりよく、当たり障り無く人とつきあうということであろうが、それでいいのだろうか？

本年、3月13日付の学内広報の本コラムに中兼先生が書かれていたことは、小生も日頃強く感じているところである。大学のアウトプットとして、もちろん研究成果は重要であるが、社会が期待している最も重要なアウトプットは優秀な人材の輩出である。子供の時から大学に入るところに人生の目標をセットされ、入学した

ときには既に物わかりがよい人間になっているのでは、何とも情けない。長い人生に対する目標を持ち、それに向かって切磋琢磨して欲しいと念ずる。気分や気質は伝染する。大学の定員が増え、大衆化が進むに従って、“東大生”らしい東大生は急激に減りつつある。絶滅だけは回避したい。

一方、我々の本業である研究はどうであろうか？昨今は、大型の研究プロジェクトばかりで、東大でも多く稼働し始めている。そのおかげで、それなりの研究費が使えるような状況にもなりつつある。しかし、ここに危ない罠が待っている。研究費を持つと、他所で既に話題になり始めたテーマを自分のところでも始めることができるようになるのである。海外の進んだ文化を吸収し、日本国内に配信するという機能を担って発足した東大であるので、百年以上経ってもそのDNAが疼き、ついついその研究費と頭脳を費やして、15番煎じぐらい（二番煎じより少しは気が利いているであろうという意味）の研究テーマをやってしまうという状態に陥りやすい。また、年限が限られたプロジェクトという性格上、自然と成果が出やすい方向に向かってしまう。この研究に対する自分の「甘さ」を戒めたいと思っているが、不毛な忙しさにかまけてしまい、毎日反省の日々である。

平川一彦（生産技術研究所）

（淡青評論は、学内の職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。）

〔訂正〕

「学内広報」 1241（2002 . 6 . 12）5頁において一部誤りがありましたので、訂正してお詫びいたします。

（誤）澤最牧場長 （正）澤崎牧場長

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報委員会の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報委員会までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、総務課広報室を通じて行ってください。

1242

2002年6月26日

東京大学広報委員会

〒113 8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学総務課広報室 ☎（3811）3393

e-mail kouhou@ml.adm.u.tokyo.ac.jp

ホームページ http://www.u.tokyo.ac.jp/index_j.html